

改新帝國讀本

卷五

3759  
Ha7  
資料室



41555

教科書文庫

4
810
41-1930
2000 30 1566

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

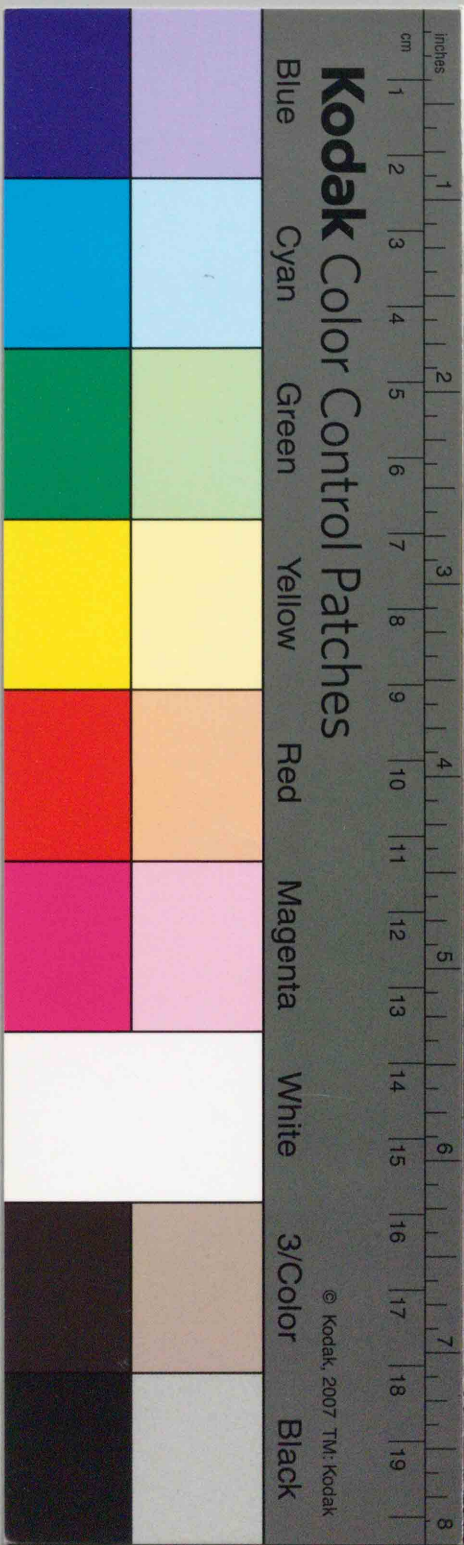


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





375.9  
H27

文部省檢定  
昭和五年二月十四日  
中國語教科用

# 改新帝國讀本

文學博士 芳賀矢一 編  
文學博士 上田萬年  
文學士 長谷川福平 訂補

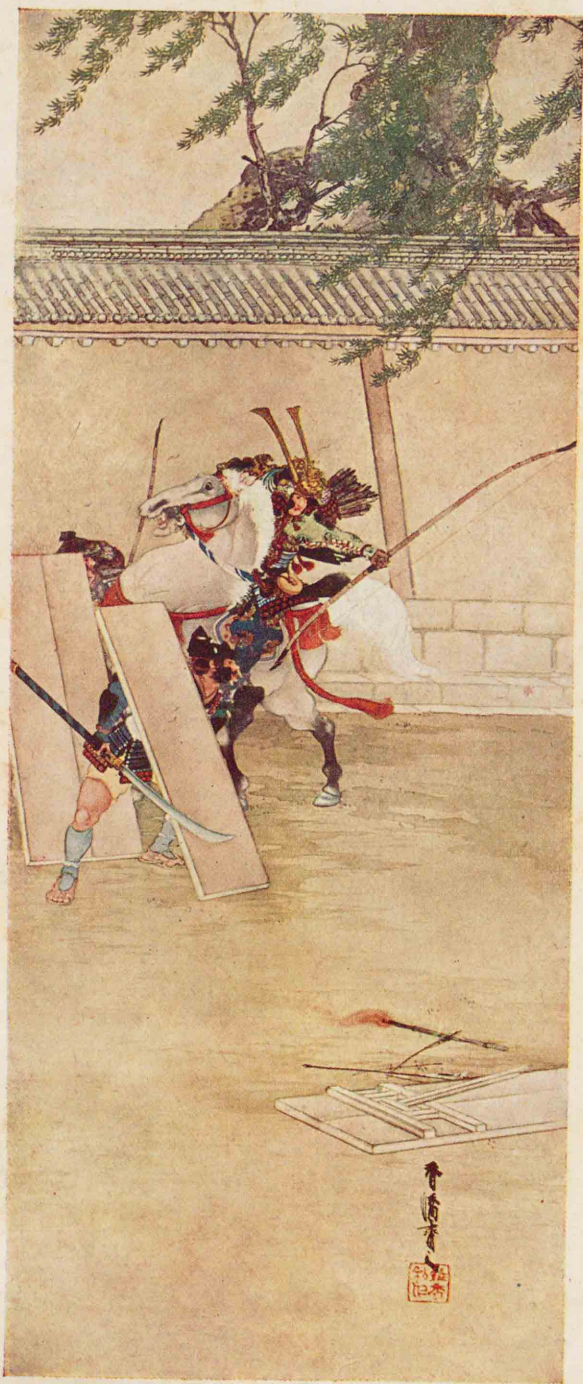
東京  
合資會社 富山房發兌

改新帝國讀本

東京  
合資會社 富山房發兌

文學博士 芳賀矢一  
文學博士 上田萬年  
文學士 長谷川福平





爲朝奮戰 谷口香崎筆

廣島大學  
圖書印





改新帝國讀本 卷五目次

一	春の山邊(古歌).....	一
二	明淨直.....	五十嵐 力..... 三
三	京都御所拜觀の記.....	一一
四	土の匂.....	長塚 節..... 一六
	春の歌(自修文).....	佐々木信綱..... 二二
五	光堂.....	泉 鏡花..... 二九
六	吉野の行宮.....	北畠親房..... 三六
七	ハンニバル.....	矢野龍溪..... 四二
八	五月の太陽.....	萬造寺 齊..... 五〇



九	山の五月	前田夕暮	五五
一〇	仁和寺の法師	吉田兼好	六〇
一一	石清水		六〇
一二	かなへ		六一
一三	箱王仇に遇ふ	(曾我物語)	六二
一四	白河殿夜討	(保元物語)	六八
一五	保元の花(自修文)	額田六福	七五
一六	戸隠登山	萩原井泉水	八四
一七	山靈	上田敏	九五
一八	伊勢志摩の海	田山花袋	九八
一九	イタリーの風景	柳澤健	一〇四
二〇	清 水(舌歌)		一一三

一八	蘭學者の苦心	加藤弘之	一一五
一九	國文學と國民生活	藤村 作	一二二
二〇	弘淨寺の松	野口米次郎	一二八
二一	十訓抄と著聞集		一三四
二二	舊藩の明君		一三七
二三	將たらんものの心得(自修文)	坪野南陽	一四五
二四	テニスの試合	尾崎喜八	一四九
二五	目蓮上人	高山林次郎	一五五
二六	舊都の月	(源平盛衰記)	一六三
二七	三つの眺		一六七



一	春の山邊	一
二	...	...
三	...	...
四	...	...
五	...	...
六	...	...
七	...	...
八	...	...
九	...	...
十	...	...
十一	...	...
十二	...	...
十三	...	...
十四	...	...
十五	...	...
十六	...	...
十七	...	...
十八	...	...
十九	...	...
二十	...	...
二十一	...	...
二十二	...	...
二十三	...	...
二十四	...	...
二十五	...	...
二十六	...	...
二十七	...	...
二十八	...	...
二十九	...	...
三十	...	...
三十一	...	...
三十二	...	...
三十三	...	...
三十四	...	...
三十五	...	...
三十六	...	...
三十七	...	...
三十八	...	...
三十九	...	...
四十	...	...
四十一	...	...
四十二	...	...
四十三	...	...
四十四	...	...
四十五	...	...
四十六	...	...
四十七	...	...
四十八	...	...
四十九	...	...
五十	...	...



改新帝國讀本 卷五

一 春の山邊

(一) 業平の孫。醍醐村上天皇頃の人。

(二) 平安時代の歌人。宇多、醍醐天皇頃の人。あやなし

(三) 歌僧。俗稱良峰玄利。清和天皇に仕へた。

かすみたつ春の山邊は遠けれど

吹きくる風は花の香ぞする

はるの夜のやみはあやなし梅の花

色こそ見えね香やはかくるゝ

見わたせば柳さくらをこきまぜて

在原元方

凡河内躬恒

素性法師

一 春の山邊

一



花見つし分  
 花は浅し  
 雲のおく  
 らは思ひ  
 に野のし  
 よし契沖  
 (一)國學者、元祿  
 十四年(二三  
 六十二年)歿、  
 六十二年

みやこぞ春の錦なりける  
 さくら狩雨はふり來ぬ  
 ぬるとも花のかげに隠れん

同じをかく

よみ人知らず

契沖筆蹟

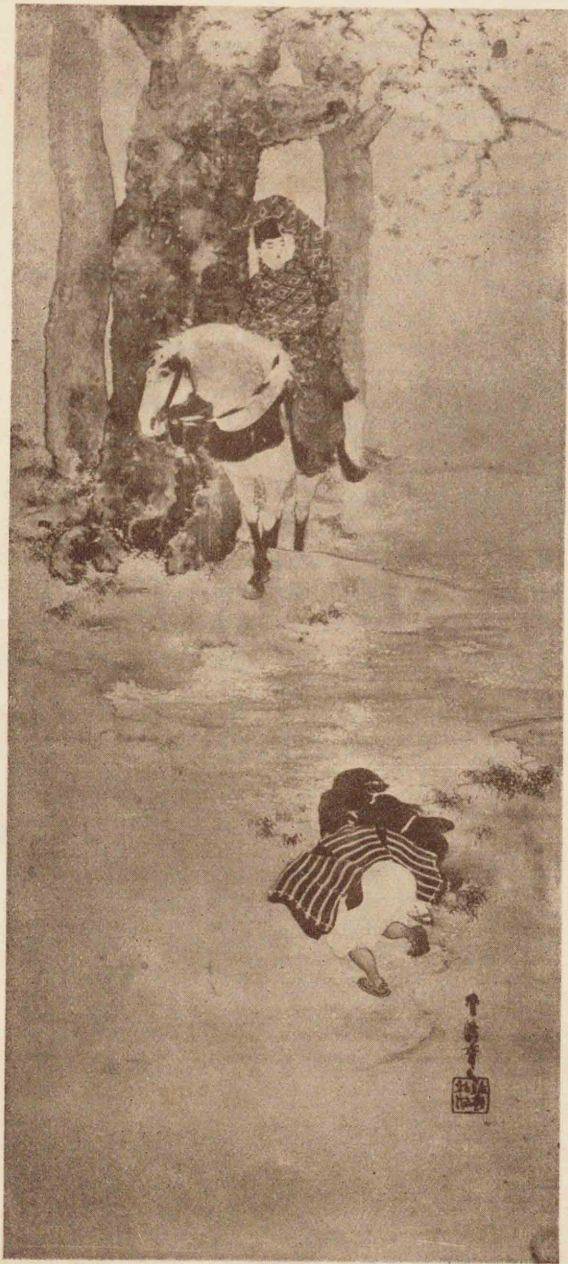
契沖

蹟筆沖契

霞とも雨とも空はわかぬ間に  
 たまぬきをむる青柳のいと  
 をしめども春の限りのけふの日の  
 夕ぐれにさへなりにけるかた

よみ人知らず

花下避雨



谷口香嶠筆



(一) 國文學者。文  
 學博士。早稲  
 田大學教授。形  
 明治七年山形  
 縣に生まれた。  
 新文章講話。新  
 國文學史。甲  
 鳥園隨筆。甲  
 國歌の胎生及  
 び發達等は名  
 著として知ら  
 れてゐる。

(二) 第四十二代。

(三) 我が國の神代  
 から推古天皇  
 までの歴史書。

(四) 三十卷。舍人  
 親王著。神代  
 から持統天皇  
 までの歴史書。  
 賦與

## 二 明淨直

(一) 五十嵐 力

文武天皇が御即位の際に下された宣命の中に、明き淨き直き誠  
 の心といふ詞がある。我等はこの「明き淨き直き心」が、日本人の性質  
 の核となり中心となるものであると考へる。この詞は代々の詔勅  
 に幾度も幾度も繰返されてゐる。しかも重きを措いて繰返されて  
 ゐる。その他、古事記、日本書紀、萬葉集などにも、重々しい場合に幾度  
 も用ひられてゐる。これは畢竟、我等の祖先が心の中に深く感じた  
 こと、大和民族に最も濃く、最も多量に賦與された性質が、自然に口  
 を衝いて出たのではあるまいか。世に大和民族の特性と稱せられ  
 る現實、光明、活動、向上、中庸、快活、忠孝、清廉、勇武、義俠、風雅などの諸性  
 質は、概ねこの明淨直の三大性質を基本として説明されるらしく、  
 殊に三種の神器がこの三大性質の標章として遺憾がないやうに



九傳的

折衷性

思はれる。次に、抽象的ではあるが、一通りその理由を説明しよう。鏡の性は明で、その徳は玲瓏透徹に物を映ずることである。日本人は鏡のやうな明き心で、正しく事物を觀た。故にその觀方は概して公平無私で、赤い物は赤いとし、黒い物は黒いとし、善行に對しては我を忘れて歎美し、惡行を見ては敢然として排斥するといふ傾があつた。天照大神は鏡を齎きて、我が大御前を見るが如くせよ。と仰せられた。全國無數の神社には、その鏡が神體として齎かれてある。詔勅や、祝詞や、君臣應對の詞などに、明き心といふ語が澤山用ひられてゐる。これ等はいづれもこの性質が、我が國民の心底に根深く植附けられてゐる證據であると思ふ。我が國民の中庸性、折衷性、調和性も、一面この根本性質の結果であらう。我が國には、政治、社會、宗教などの諸方面にわたつて、諸外國に見るやうな非常な大衝突はない。全くないではないが、割合に少く、またいつもそれが調和す

騎虎の勢

(一)新納武藏守忠元の作。

る傾がある。例へば、異主義が新たに外國から入つて來たとする。毛色が變つてゐるので、暫くは新舊相争ふが、やがてお互にそれには道理も無理もあることを解すると、ばからしくなつて、最早爭論が續けられなくなる。そこで、騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして、長短取捨の調停をする。萬事がこの通りである。僅かあれだけの騷亂で明治の維新を見たのも、平和の裡に憲法を得たのも、君臣、父子の親和も、萬世一系の國體も、一面皆「明」といふ基本的國民性の賜ではあるまいか。馬上に天下を得た武將が文藝の獎勵に骨折るのも、群雄割據の亂世に陣中かぶり火の下で古今集を讀む武將のあるのも、同じく戰國時代に、敵ぞとて何かは人の憎からん、同じ御國の同じ身なれば、と詠んで、敵を同胞として愛した勇將のあるのも、武士が僧侶に親しみ、僧侶が武士につくすのも、乃至さつぱりと腹を切るのも、一は事を見ることが明らかであつて、理に従ふことが流れる



(一) イエルサレムの聖地を回教徒であるト起す人から奪還する爲に西暦一七〇六年に戦役を起し、一七〇九年に赤十字の右肩に赤十字の記章を附けたが、この名が故に「洞然」の意となるまで綴いた。

(二) 西暦一七八九年佛國ルイ十六世の時、起つた革命に、レオンがナポレオンとなつたまで綴いた。

澄徹の趣

やうな根本性によるのではあるまいか。大和民族は、十字軍やフランス革命のやうな極端な狂言を演ずるのには、あまりに心が明る過ぎる傾がある。我等は、日本人を公正といひ、理に鋭いといひ、感情の平靜を保つといひ、何事をも受容れる胸懷の洞然たる人種であるといつた外人の批評は、あながちでたらめの空世辭ではないと思ふ。

清淨の徳は玉に於て絶好の標章を得てゐる。淨と明とは似てゐるが、同じではない。その違ふ趣は、ちやうど鏡と玉との違ふ趣に似てゐる。汚穢濁濁を忌むことは、清明共に同様であるが、清はそれ以上、味はひのあり温かみのあることを要する。譬へば、鏡は空白で正しく物を映すれば足りるが、玉は必ずしも空白で物を映ずることを要しないで、温潤の光、圓融の相、澄徹の趣のあることを要するやうなものである。本來日本人は、明らかに事物を見る長所を有する

むくつけし

るばかりでなく、外物を看るのにも、自己を發表するのにも、一種の味はひのある態度を具へてゐる。その明は空白の明ではなくて、温潤、圓融、澄徹の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくて、水晶夜光珠の明である。我が國は、古來、禊祓が多く行はれ、廣く用ひられ、且つ重要視されてゐた。祝詞、宣命を始めとして、多くの歌詠、諷謠は明き心を現しながら、趣味、風韻に富んでゐる。しかもその趣味や形容が、諸外國、例へば支那の文字に見るが如き、張子の虎のやうな誇張の弊がなく、よくその實を現し、中味に相應した修飾を纏うてゐる。むくつけき武人にも、戦陣の間に花を翳し、歌詠を贈答し、或は胃に香を焼きしめるといふやうな嗜があつた。上流社會はいふに及ばず、市井の民に至るまで、一般にそれにふさはしい文字をもつてゐる。外國出稼の労働者が、その日の生活に窮しながらも、なほ一二の植木鉢をもたぬものはなく、そしてこれは外國の労働者に絶えて



物好し悪し直を見よ力

審美眼

しやうかきか決心のつかか

いこと

わらゆりしこと

首鼠兩端

どろんつかるかきひうこと

見ないところといはれてゐる。大工、指物屋の手に成るはかない家  
具や細工物も、西洋の表面だけ美しくて裏面の粗末なのに反し、我  
が國のは見えない裏面にまでも手をつくすといふ嗜がある。これ  
等はいづれも大和民族が清きを愛する根本性の現れたものではあ  
るまいか。我等は日本人は世界第一の審美眼を有する國民にして、  
貴族より労働者に至るまで皆美術を愛翫す。といつた一外國人の  
批評が、必ずしも虚妄でないと思ふのである。  
直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味する。  
その厭ふところは躊躇、緩慢、首鼠兩端である。曲ること、拗れること、  
邪なことである。叢雲の劔はその標章としてこの上なくふさはし  
い。元來直の徳の本領は、心の明らかに見たところに向かつて直前  
するのにある。若し右の三徳を一括してこれを一體と見れば、明は  
その靜的方面即ち知の方面で、直は活動方面即ち意の方面である。

し

(一) 父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし、つぐし云々 (萬葉集 山上 憶良)

(二) 海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君のへにこそ死なめ、かへり見はせし。 (萬葉集 大伴 家持)

知の明らかに見たところを意が直進して實現する。そして知の見  
方、意の働き方に、潔くていひ知らぬ味はひのあるのが、邦人固有の  
性格といふべきであらう。明き心を以て、父母を見れば尊し、妻子見  
ればめぐし。故にその明き心の示すところに従ひ、直前して父母に  
事へ、妻子を愛しむ。君を仰げば、八隅知し大君、現つ神として國に臨  
み給ふさまが、限りなく高く貴い。故に直前して、海行かば水漬く屍、  
山行かば草むす屍の獻身的奉公を致すのである。そしてその君父  
に事へ、妻子を愛しむや、多くは水臭い思慮、分別、利害勘定の結果で、  
なく、眞實掬すべき趣があつた。ここが眞淵、宣長等の國學者が感歎  
し、自負して措かなかつた點である。無論何處の國にも文化の進ま  
ぬ時代には、かやうな自然的の性向があつたであらうし、大和民族  
にも利害勘定の行爲がなかつたとはいはれないであらう。また  
自然眞實の行爲に弊害が伴はないともいはれないであらう。け



れども、我が民族の特徴の一面は、とにかくこの點に存したやうに思はれる。その例は、遠い昔では、素戔嗚命に見ることが出来る。あの日本武尊も、素戔嗚命系の勇者である。次いで、鎮西八郎爲朝の腕白、勘當、九國押領、召還、保元の勇戦、大島配流の一生、これも素戔嗚命系の大立者。これ等いづれも向う見ずのやうでありながらも、妙に情に厚いところがあり、君父のこととあれば、水火も辭せず、直前するといふ風があつた。直、斷、決、勇の權化で、確かに大和民族固有性の一面を背負つて立つヒーローであつた。その他、蒙古來寇の時に西海の將士が身命を棄てて防戦した態度を見よ。代々の武士が、千よるづの軍なりとも言あげせず、取りて來ぬべき男とぞ思ふ。といふやうな斷乎たる覺悟を見よ。畠山重忠や加藤清正の如く、竹を割つたやうに正直な豪傑が國民に尊崇されるのを見よ。曾我五郎朝比奈三郎のやうな一徹者が國民に愛せられるのを見よ。豁然大悟

(一) Hero.  
(二) 弘安四年(一  
九四一年)  
(三) 高橋蟲磨の歌、  
萬葉集にある。

(四) 和田義盛の三  
男義秀。安房  
國朝夷郡(今  
安房郡)に生  
長したので朝  
比奈と稱した。  
豪勇無雙の士。  
一徹者  
豁然大悟

依怙

金誠

殿掌  
踏む足も空

(一) 山本常朝の著  
で俗に「佐賀  
論語」と稱せ  
られる「業隠」  
中にある詞。

の禪宗が盛に行はれたのを見よ。眞偽は知らないが、正直は一旦の依怙にあらずと雖も、遂に日月の憐みを蒙る。謀計は眼前の利潤たりと雖も、必ず神明の罰にあたる。といふ戒が、天照大御神の御言葉として、神道家に唱へられてゐた。武士には「七息思案」といふ格言があつて、分別も久しくすれば、收る。武士は物事手取早くするものぞといふことが、武士道の金誠になつてゐた。これ等はいづれも直を好む性質が、大和民族の心性の基本精髓をなしてゐる證據なのである。

### 三 京都御所拜觀の記

京都御所を拜觀したる時ほど、神々しかりしことなし。我が拜觀したるは四月半ば頃なりしが、殿掌なる人に導かれて、かしここ廻るに麗かなる都の春は、たゞこの九重のうちに籠れるが如く、踏



里内裏

(一) 第一百十九代光格天皇の天明八年(二四四八年)

(二) 孝明天皇の御代。元年は紀元二五十四年。

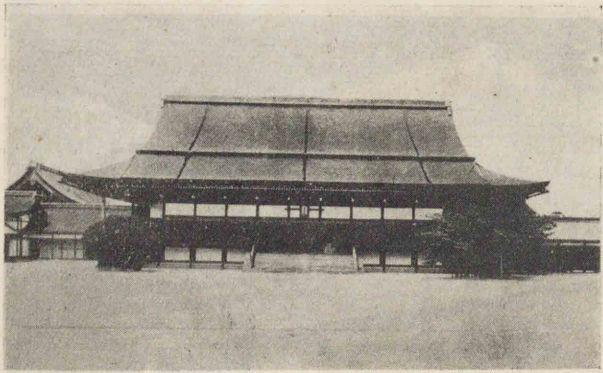
む足も空にて、人間の世界を出でたるやうなり。私に承るに、皇居は初よりここにありしにあらざ。平安時代の末よりをりをりの里内裏となり、今より五百餘年前よりここに定まりしなり。百四十餘年前天明の大(一)火後、幕府勅命を受け、老中松平定信に命じて、新たに造營の工を起す。従来略式にのみなり行きし皇居も、この時より儼然として舊制に復したり。然るに安政元年また大火に遭ひ、更に造營の工事あり、概ね定信が定めし式に従はしめられたる、即ち今の御所ぞかし。



子 障 聖 賢

故實をたゞす

紫宸殿、清涼殿等は定信が深く故實をたゞし、平安時代の舊制に



殿 宸 紫

復せしものなり。今の御所もまたこれに倣へるものにして、千年の昔を目のあたり見る心地す。紫宸殿は皇居の正殿にして南面し、その前に南庭あり。階前の左右に左近、櫻、右近、橘の二本の樹ある外は塵も留めず。今は春の日の、一面に敷詰めたる砂を射て、眩きばかりなるが、元日の節會に、ほのぼのと明離れたる初日の光など、いかにめでたからんと覺ゆ。

節會

(一) 有名な畫家。清和、陽成、光孝、宇多、醍醐、白河の五朝に歴仕し、官大納言に至つた。

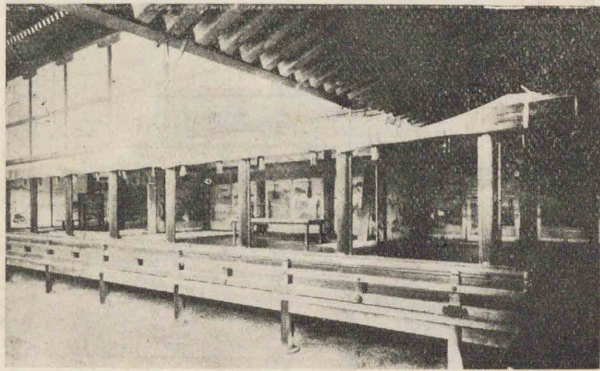
殿は廣き一面の板敷にして、中に唐代の賢臣を描ける襖あり。所謂賢聖障子にして、昔は巨勢金岡の筆になれるものなりきといふ。



御帳臺

威儀の人

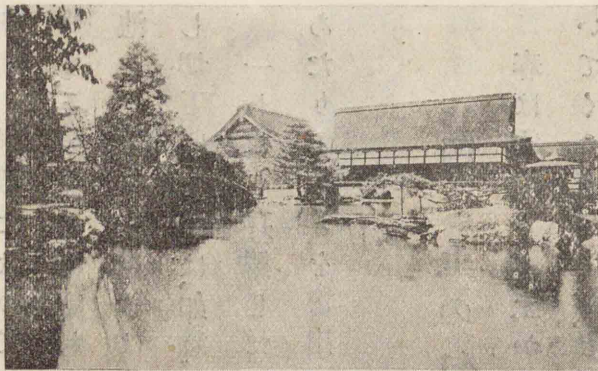
世移り風變る



清涼殿

明治天皇も、大正天皇も、ここにて御即位の式を挙げ給ひしなり。大正四年の大典には、余も参列者の一人たる光榮を擔ひしが、この日、紫宸殿上には天皇陛下の高御座と、皇后陛下の御帳臺とを据え、階下近く立てたる日光月光の大旛を始めとして、紅、黄、綠、紫、幾十の大旛小旛、風に翻れるも麗しく、威儀の人の黒袍、紅袍、鉦鼓の人の綠袍にて居並びたるも、嚴しかりき。廻廊には大禮服の文武官、燕尾服の衆議院議員、外國使臣も交りて、その對照誠に面白く、古今東西の文化を集めたる盛觀とぞ覺えし。清涼殿は昔は主上の御居間なりしが、世移り風變りては、日常の御起居に適せずなりて、近世はたゞ上古

母屋 塗籠



小御所

の形を存したるなりと申す。正面の廂間に晝御座あり。母屋に御帳臺を立つ。傍の塗籠は夜御殿とて、御寢所なり。母屋の南の別室は、殿上といひて、殿上人の祇候する所であり。東なる弘廂に昆明池障子あり。昆明池障子に近く荒海障子あり。一は漢の昆明池を描き、一は手長、足長が魚を捕らふる圖を描く。また殿上の上戸の東外には、年中行事障子とて、年中行事の次第を記し、ものあり。西外には跳馬障子あり。上古のは金岡の筆にして、夜々脱出でて萩戸の萩を食ひしかば、勅ありて轡を描き加へしめられたりと傳ふ。清涼殿は東面して、階前に漢竹、吳竹を植ゑ、御溝の水その側を流る。



林泉の巧  
〔賀茂川の一名〕

その他には小御所、御學問所、常御殿等あり。いづれも近世の様式なり。小御所、御學問所は謁見など仰せつけらるゝ所をりにより拜謁者の階級によりて、ここかしこの別あり。常御殿は即ち御居間と申す。その東の御庭、林泉の巧いふばかりなし。蟬の(一)小川を堰入れて池をたゝへ、池邊には花木を植ゑて、四季の眺絶えず。彼方の木立少し切下げたるは、如意嶽の大文字の火を望み給はんが爲とぞ。  
一わたり拜觀したるばかりにて、よくは覺えず。九重の雲深き御あたりのことを書出づるも畏しや。

― 高等小學讀本に據る ―

### 四 土の匂

長塚節

〔二〕歌人、小説家、茨城縣の人。大正四年歿。年三十七。小説家、山鳥の、渡等、著が、あり、現に長塚節全集六卷がある。  
はやて  
空際

春は空からも、土からも微かに動く。毎日のやうに、西から埃を巻いてくるはやてが、どうかするとはたと止つて、空際にはふはふはして綿のやうに白い雲が、ほつかりと暖かい日光を浴びようとし

ぢみな蕾

蟄居



長塚節 (筆總百福平)

て、僅かに立騰つたといふやうに、じつと動かずにあることがある。水に近い濕つた土が、暖かい日光を念ふ一杯に吸つて、その勢づいた土の微かな刺戟を根に感じさせると、田圃の榛の木のぢみな蕾は、目に立たぬ間に少しづつ伸びて、ひらひらと動き易くなる。その刺戟から、蛙はまだ蟄居の状態に在りながら、稀にはそつちでも、こつちでも、くゝと鳴きだすことがある。空から射す日光はそろそろと熱度を増して、土はそれをいくらでも吸つて止まない。土はすべてをだんだんと刺戟して、堀のほとりには蘆や、芝や、その他の草が空と相映じて、すつきりとその首を擡げる。軟かさに満たされた空氣を更に鈍くするやうに、榛の木の花はひらひらと止まず動きながら、煤のやうな花粉を撒散らしてゐる。蛙は假死の状態から離



本性

れて、軟かな草の上に手を突いては、驚いたやうな様子をして、空を仰いで見る。さうして彼等はあわてたやうに聲を放つて、その長い睡眠から復活したことを空に向かつて告げる。それで遠く聞く時は、彼等の騒がしい聲は、たゞ空にのみ響いて、快げである。

彼等は更に、春の到つたことを一切の生物に向かつて促す。草や木が心づいて、その活力を存分に發揮するのを見ない中は、鳴くことを止めまいと力める。田圃の榛の木は疾うに花を捨てて、自分から先に、嫩葉の姿になつて見せる。黄色みを含んだ嫩葉が、爽かな朝日を浴びて快い光を保ちながら、蒼空の下にまだためらつてゐる周囲の林を見る。岬のやうな形にはつてゐる水田を抱へて、周囲の林は漸くその本性のまにまに、勝手に白つほいのや、赤つほいのや、黄色つほいのや種々に茂つて、それが氣がついた時に、急いで一つの深い緑になるのである。雑木林のそこらこころに散在してゐる

空間

開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黒い瞳を聚めて、羞しさうに葉の間から、こつそり四方をのぞく。雑木林の間には、また芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。その麥や芒の下に居を求める雲雀が、時々空を占めて、春がふけた。と呼びかける。さうすると、その同族の聲のみが空間を支配してゐるべきはずだと思つてゐる蛙は、その囀る聲を押し去らうとして、互の身體を飛越え飛越え鳴きたてるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中のみ、これを仰げばまばゆさに堪へぬやうに、その身を遙かに煌く日の光の中に没して、その小さい喉のちぎれるまでは、激しく鳴らさうとするのである。蛙は愈益、鳴きほこつて、樫の木のやうな大きな常磐木の古葉をも、一時にからりと落さねば止むまいとする。

この時、すべての樹木や、それから冬季の間には、ぐつたりと地に



附いてゐたすべての雑草が爪立して、たゞ空へ空へと暖かな光を求めて止まぬ。土がそれをじつと引きとめて放さない。それで一切の草木は、土と直角の度を保つてゐる。冬季の間は土と平行することを好んでゐた人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く、土に直立して、銘々に手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと思ふ時、蛙は一齊に、裂けるかと思ふほど喉の袋を膨脹させて、身を撼かしながら、殊更に鳴きたてる。白い絨絲のやうな雨は、水が田に満ちるまでは、注いでまた注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にのみ生まれて来た蛙は、刈株を引返し引返し働いてゐる人々の周圍から足下から逼つて、敏捷にその手を動かさせ動かさせと促して止まぬ。蛙がびつたりと聲を呑む時には、日中の暖かさに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草にごろりと横になる。更にひつそりと静かな夜になると、蛙はいかに自分の聲が遠く且つ遙かに響くか

聲を呑む

を誇るやうに、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙の聲はめつきり遠く遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた耳をくすぐつて、百姓のすべてを安らかな眠に誘ふのである。熟睡することによつて、百姓は皆短い時間に肉體の消耗を恢復する。彼等が雨戸の隙間から通す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲にその覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を呼返すのである。草木は遠く遙かに響けと鳴くその聲に揺られつゝ、夜の中に生長する。櫟や檜や、その他の雑木は、蛙が鳴けば鳴くほど、さうしてそれが鳴きやむ季節までは、いくらでも繁茂することを繼續しようとする。そこには、毛蟲やその他のあさましい損害が或はあるにしても、しとしとと屢梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思ふやうに、力強い緑が地上を掩うて、爽かな涼しい蔭を作るのである。



(一)國文學者。歌人。文學博士。明治五年三重縣に生まれた。日本歌學史。萬葉集選釋。萬葉集論叢書。歌學論叢書。歌集百話。校本。萬葉集等の著がある。

自修文

春の歌

(一) 佐々木信綱

春の天地となつた。空は霞み花は咲き鳥は囀る春の季節ほど、我々の心を浮きた、せ樂しくするものはありません。冬が去つて春になつた心持は、ちやうど暗い北國から明るい南國へ来た心持にも譬へませうか。長い森の中をわけ上つて出て、山上の湖水を見た心地にも譬へませうか。四季の變化の中から、冬から春になる時ほど、人の心を動かすことはありません。まして物事に感じの鋭い詩人や歌人は、一しほ切にこれを感じるのであります。さうであるから春を迎へて鶯の聲を聞いた心持や、青く草の萌えた野べの眺や、霞や花や、かゝる春の風物は幾千年來歌人の心を動かして、多くの歌や詩となつて傳はつてゐます。

(二) すが原や伏見の暮に見わたせば

霞にまがふ小初瀬の山

風物

四季をりをりの風景をかたちづくるもの。

(三)作者不詳

(一)後撰和歌集。二十卷。古今集につぐ勅撰歌集。

(二)奈良縣磯城郡。初瀬村。

(三)江戸の歌人。海野遊翁の歌。

これは後撰集に出てゐる歌であります。すが原や伏見といふのは、奈良の西の方で菅原天神の社があり、喜光寺といふ寺のある小村でその昔は有名な名所であつたのです。そこから遙かに初瀬山の方が見える。この歌はこの景色を詠んだので、歌の意味は、菅原の伏見の里の夕暮に見わたすと霞かと見まがはれる小初瀬の山かなといふのです。今はこの里も荒れはてて、喜光寺といふ古寺はその儘の荒廢した姿で、田畑の中に立つて居ります。そのほとりに立つて、昔ながらの初瀬山を見ながらこの歌を誦すると、感慨が何ともいへません。

(三) 朝日かげにほへる窓にうぐひすの

かげこそうつれ今や鳴くらん

障子一杯にさしこんだ春の朝日が晴れ晴れしい。何ともいへぬよい心持で見ると、鶯の影が寫つた。それにつけて、さあ鳴出すだらうと待つてゐる間の感じを詠んだ歌です。何人でも經



(一) 福岡の歌人。大隈言道の歌。

験して感じるところをうまくとつて、いかにも春の朝の長閑な心持をよく詠んでゐます。誠に氣持のよい歌であります。

里人はさかりもめでずさく梅も

荒れたるまがき草むらのうち

里の人たちは梅の盛をもめでない。同じく咲いても荒れはた垣根のうちや、草むらの中にあるばかりで、といふ意である。半ばさういふ梅をあはれんだとともに、さういふところに、咲いてゐる梅の却つて感じの深いことを讃へたのです。歌を詠む人はかういふところを見つけねばなりません。

峰の霞麓の草のうすみどり

野山をかけて春めきにけり

「野山をかけて」は、野山をおしなべてといふこと、歌の意味はごくわかりよい。山の上には霞がたなびき、麓の野べには草が青く萌えて、見わたすかぎり野も山も一帯に春らしくなつたといふ

(二) 伏見院の皇后永福門院の御歌。

(一) 備中の歌人。木下幸文の歌。

ので、やすらかな詞の中に春の景色がよく歌はれて居ります。

遠く行く人を送りてやすらへば

堤のやなぎうちかすみつつ

遠く旅立つて行く人を送つて、立どまつて、一休みしながら、その別れ行く人の行手を見てゐると、長堤遙かに連なつてゐる柳の影も霞んでゐることよといふので、隅田川とか賀茂川とかいふ川岸で人を送つたところす。別れて行く人は長堤の上をとぼとぼと歩いて行つたか、或は川の上を舟で行つたか、いづれとも解せられるが、そはとにかく、あつさりといつてのけた中に、人を送つて盡きない恨の情が、美しく現れてゐます。いかにも春の別らしい感じを興へます。

隅田川簑きてくだす筏師に

霞むあしたの雨をこそ知れ

雨の降る日など、向島あたりの土手に立つて、隅田川の川面を

(四) 江戸の國學者。加藤千蔭の歌。

(二) 荒川の下流。東京市の東部を貫いて東京灣に流れ入る。京都市の東部から發し、京都市の東邊をながれて、淀川に注ぎ、淀川に流れ入る。



さだか  
明らか。

(一)因幡の歌人。  
飯田年平の歌。

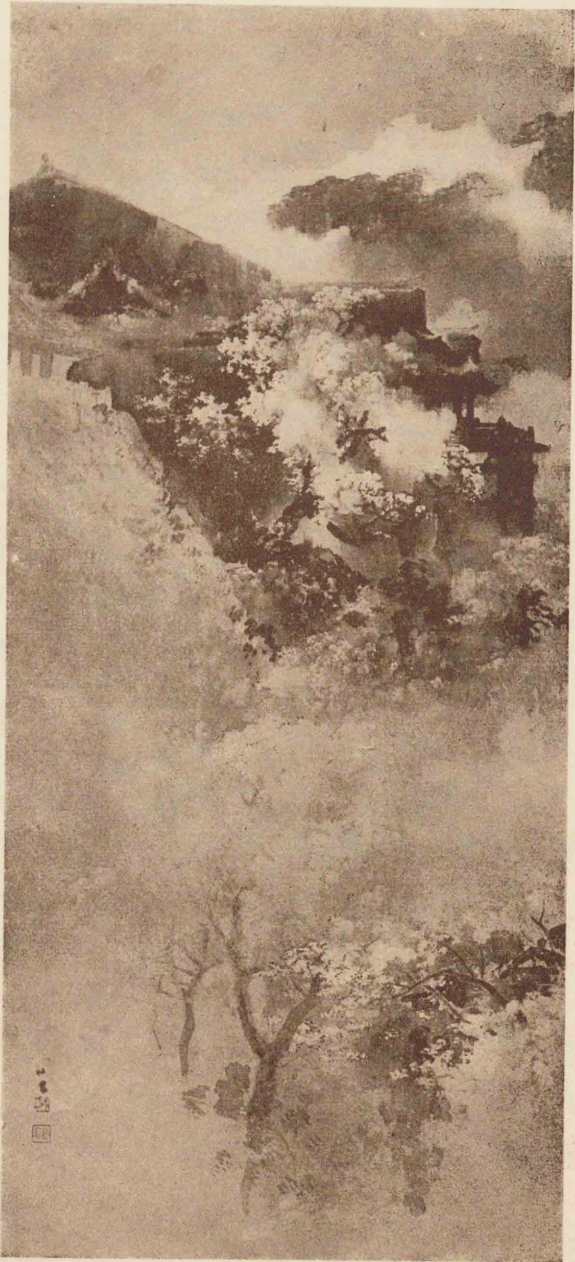
見る時、多少歌を知つてゐる人の心に浮かぶのはこの歌でせう。それほど世に知られてゐる有名な歌です。隅田川を筏をきて下る筏をこぐ人によつて、霞みわたつてゐる朝のほどの雨を知るといふので、降るとはいへど、春雨のしとしととしてゐるのに、川の上は深く霞がこめてゐるから、雨か霞かさだかでない。たゞ川の上をこぎ下す筏の船頭の簑姿によつて、始めてあゝ雨が降つてゐるなと知るといふのがこの歌の急所で、巧みな美しい趣のある歌であります。

(一)もとの花散る軒の春雨に

つばめのひなのゆくへをぞおもふ

軒端に咲いてゐるたゞ一本の櫻の花を散して春雨が降つてゐるにつけても、どこへ行つたのかわからなくなつた燕のひなの行方が想はれるといふので、花散る春雨につけて、燕のひなの行方を想ひやるといふ、いかにも美しい優しい感じの歌で、春の

清水寺の雨



竹内栖鳳筆



(一)同じく飯田年  
平の歌。

(二)中原致時の歌。

心持がよく歌つてあります。

(一) いくたびか起きては犬のねぶるらん

花散る宿の夕ぐれの雨

前には燕を詠み、これは犬を詠んでゐる。同じく花散る雨の夕べで、これはその犬が幾度起きては幾度ねぶるであらうといふので、その長閑な夕方の景色の中に、犬も心よさに、いかにもうとうとするであらうと想ひやつたので、長閑な春の心持を現したの  
は前の歌と同じであり、犬をとりだしたところに、新しい面白味  
があります。

(二) 梅が香を櫻の花ににほはせて

柳の枝にさかせてしがな

同じ春を飾る花ではありながら、梅は匂をもてすぐれ、櫻は花をもてすぐれ、柳は枝ぶりをもてすぐれるといふやうに、それぞれ  
れ特長がある。この三つの特長を一つにして、梅の香りを櫻にも



(一)尾張の歌人。問島冬道の歌。

たせ、それを柳の枝に咲かせて見たいと想像して見たのがこの歌で、その着想に少しいやみがないが、誠にさうするこ  
とが出来たらば、どんなにけだかく美しく優しい花が出来るで  
あらう。これは人間でも同じである。人の力で梅櫻柳を一つにす  
ることは出来ぬが、人は心が次第で他人の長所をとり入れ、同  
時に自分のよいところを發達させることが出来る。かう考へて  
くれば、この歌は教訓にもなる歌であります。  
遠方の一むら霞ほのぼのと  
朝早く眺めてゐると、遠方に立ちこめてゐた霞がほのぼのと  
明けはなれて、見る見る松の木立に變つてゆく美しさよといふ  
ので、霞がほのぼのと松になつてゆくといふいひ方が、歌として  
は誠に巧みである。理屈でいへば、霞が松になるといふわけはな  
いが、それをさういつて、霞の中から松が現れてゆくその感じを

最も適切にいひ現したのである。歌を詠むには、かういふいひ方  
をよく注意しておかねばならぬのであります。——和歌百話——

五 光 堂

泉 鏡 花

山道二町許り、中尊寺はもう近い。

大きな廣い本堂に、見上げるやうな釋尊の外、寂寞として何もな  
い。それが莊嚴であつた。日の光が幽かに漏れた。

裏門の方へ出ようとする傍に寺の厨があつて、そこで巡覽券を  
出すのを、車夫が取次いでくれる。巡覽すべきは、初め藥師堂、次に寶  
物庫、さて金色堂所謂光堂、續いて經藏、辨財天といふ順序である。皆  
參詣の人を待つて、始めて扉を開く。すぐまたあとを鎖するのである。  
寶物庫には番人がゐて、經藏には年紀の少い出家が、火の氣もなし  
に、一人經机に向かつてゐた。

(一)小説家。名は鏡太郎。明治六年金澤に生  
まれた。湯島詣  
巡査。湯島詣  
高野聖等の著  
鏡花全集十五  
卷に収められ  
てゐる。  
(二)岩手縣西磐井  
郡平泉村。嘉  
祥三年(一五  
一〇年)慈覺  
大師の開基し  
たものといふ。  
厨



初め薬師堂に詣でて、それから寶物庫を一巡すると、ここの番人のお小僧が鍵を手にして、一條道を隔てた丘の上に導く。階の前に八重櫻が枝もたわぶに咲きつゝ、且つ芝生に散つて、敷いたやうであつた。

櫻は中尊寺の門内にも咲いてゐた。麓から上らうとする坂の下の取附の所にも、一本見事なのがあつて、山中心得の條々を記した禁札と一緒に、たしか「浅葱櫻」といふ札が建つてゐた。

けれどもそのみには限らない。ところどころ汽車の窓から見た櫻は、奥が暗くなるに随つて、ほつとさえを見せて咲いたのはなかつた。薄墨、鬱金、また浅葱といつたやうな、どの櫻も皆ぼつとりとし



部外堂色金

空さま

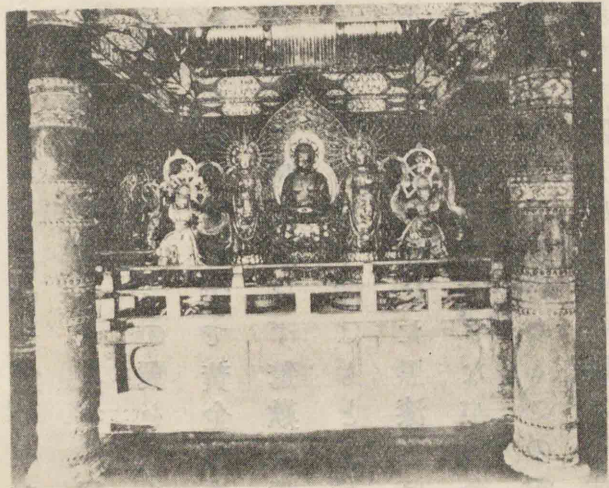
浮彫

て曇つて、暗い紫を帯びてゐた。雲が黒かつた爲かも知れない。と、階の前の花片が、をりからの冷たい風にはらはらと誘はれてさつと散つて、この光堂の中を空さまにひらりと紫に舞ふかと思ふと、羽目に浮彫した孔雀の尾に、玉を刻んで緑青にさびたのが、なほ嚴かに美しい。その翼をほらほらと叩いて、ちらちらと床にこぼれかゝる。やがて宙で黄金の卷柱の光を受けて、ほつと金色に翻るのを見た時は、思はず驚歎の瞳を見はつた。

仙骨  
七寶莊嚴  
種々相

床も、なげしも、柱はもとより、佇む所、踏む所は、黒漆の落ちた黄金である。黄金の剥げた黒漆とは思はれないで、しかも些のけばけかしい感じが起らぬ。さながら金粉の薄雲の中に立つた趣がある。我等仙骨をもたない身も、この雲は且つ踏んでも破れぬ。その雲を透かして、四方に七寶莊嚴の卷柱に對するのである。美しい虹をその儘柱にして描いた十二光佛の微妙な種々相は、一つ一つ錦の絲に





白露を鏤めた如く、玲瓏として珠玉の中に顯れて、清く明らかに、しかも幽かな幻である。その十二光佛の周囲には、玉螺鈿を星の流れが如く輝かして、寶相華、勝曼華が隙間もなく咲きめぐつてゐる。この柱が須彌壇の四隅にある。誠に天上の柱である。須彌壇は三座あつて、壇上には彌陀、觀音、勢至の三尊、二天、六地藏が安置され、壇の中には眞中に清衡、左に基衡、右に秀衡の棺が納り、ここに各一口の劔を抱き、鎮守府將軍の印を帶び、錦袍に包まれた三つの屍が、ただその儘に横たはつてゐるさうである。

天界一叢の雲



雛茶子の紅は美人の屍より咲いたと聞く。光堂はここに三個の英雄が結んだ金色の果なのである。

迦頻陵迦の目羽

謹んで辭して、天界一叢の雲をおりた。階を下りざまに見返ると、外圍の天井裏に蜘蛛の巣がかゝつて、風に軽く吹かれながら、きらきらと輝くのを、不思議な塵よと見れば、一粒の金粉の落ちて輝くのであつた。さて經藏を見よ。またいやが上に懐かしい。羽目には天女、迦陵頻迦が髣髴として舞ひつゝ、奏でつゝ、浮出てゐる。影を受け、た束貫の材は、鈴と草の花との玉の螺鈿である。



爛々

拂子  
錫杖

紺紙金泥

(一)平泉村。醫王  
山金剛王院と  
いひ嘉祥年  
中慈覺大師の  
開基したものと  
傳へる。

漆塗金の八角の臺座には、本尊文殊師利朱の獅子に騎しておは  
します。獅子の眼は爛々として、赫と眞赤な口をあけた、青い毛の部  
厚な横顔が見られるが、づづつと足を舉げさうな構である。右にこ  
の轡を取つて、ちよつと振向いて、菩薩にものをいひさうなのが優  
闐王、左に一匣を捧げたのは善哉童子、この兩側左右の背後に淨名  
居士と佛陀波利とが、一は拂子を振り、一は錫杖に一軸を結んだの  
を肩に擔ぐやうに杖ついて立つ。髭も、額も、目も、眉も、そのいづれも  
莞爾莞爾として、文殊も微笑んでまします。第一獅子が笑ふのであ  
る、獅子が。

この須彌壇を左に一架を高く設けて、ここに紺紙金泥の一卷を  
半ば開いて捧げてある。見返しは金泥銀泥で、本經の圖解を描く。清  
麗巧緻で、且つ神祕である。  
今ここに來てこの經を見ると、毛越寺の彼は恰も砂金を捧げる

が如く、これは月光を仰ぐやうであつた。

架の裏に色の青白い瘦せた墨染の若い出家が一人ゐた。私の一  
禮に答へて、お緩り御覽なさい。

散佚  
二三の散佚はあらうが、いふまでもなく、堂の内壁にめぐらした  
八つの棚に満ちて、二代基衡のこの一切經、一代清衡の金銀泥一行  
まぜ書の一切經、並びに判官びいきの第一人者三代秀衡老雄の奉  
納した黄紙宋板の一切經が、皆黒耀の珠玉の如く漆の架に満ちて  
ゐる。一切經の全部量は、七駄片馬と稱へるのである。

「拜見をいたしました。」

「はい。」と腰衣の素足で立つて、すつと經堂を出て、朴齒の高足駄で、  
卷袖で、寒くほつそりと草を行く。清らかな僧であつた。

— 鏡花全集 —

七駄片馬



六 吉野の行宮

北 畠 親 房

(一)吉野朝の忠臣。正平九年(二)〇一四年(三)年六十三(四)職原抄(五)古今集(六)神皇正統記等の著がある。延元年(一)五月(二)九九年(三)足利尊氏(四)正平十三年(五)卒。相語らふ。

(四)第九十六代後醍醐天皇。(五)恒良親王。後醍醐天皇の第六皇子。延元三年(一)卒。(六)藤原實世。正平十三年(二)卒。(七)新田義貞。吉野朝の忠臣。延元三年(三)戦死。内侍所

(一)五月にも成りぬ。尊氏等西國の兇徒を相語らひて、重ねて攻上りぬ。官軍利なくして都に歸り参るほどに、同二十七日また山門に臨幸し給ひけり。八月に至るまでたびたび合戦ありしかど、官軍進まざりき。十月十日の頃にや、主上山門より還幸いとあさましかりしことどもなれど、なほ行末を思し召す途ありしにこそ、東宮は北國に行啓あり。左衛門督實世卿以下の人々、左中將義貞朝臣をはじめて、さるべきつはものも數多仕うまつりけり。同十二月に忍びて都を出でましまして、河内の國に正成といひしが一族を召具して、吉野に入らせ給ひぬ。行宮を造りて渡らせ給ふ。もとの如く在位の儀にてぞましましける。内侍所も遷らせ給ひ、

神璽も御身に隨へ給ひけり。誠に奇特のことにてこそありしか。吉野の行幸に先立ちて、義兵を起すやからもありき。臨幸の後には國々にも御志あるたぐひ數多聞えしかど、次の年も暮れぬ。またの年戊寅の春



陸奥靈山に據る北畠親房家 (秋長田磯)

の京になん着きにける。それより所々の合戦數多たび、互に勝負ありしに、同五月和泉の國石津といふ所にての戦に、時や到らざりけん、忠孝の道ここに極りにき。苔の下にもうづもれぬものとは、

(一)源顯家。吉野朝の忠臣。北畠親房の子。延元三年(一)戦死。年二十一。(二)義良親王。(三)大阪府泉北郡時や到らざりけん。(四)もるともに苔の下には朽ちすしてうづもれぬ名を見らる。悲しき。金葉集、和泉式部。

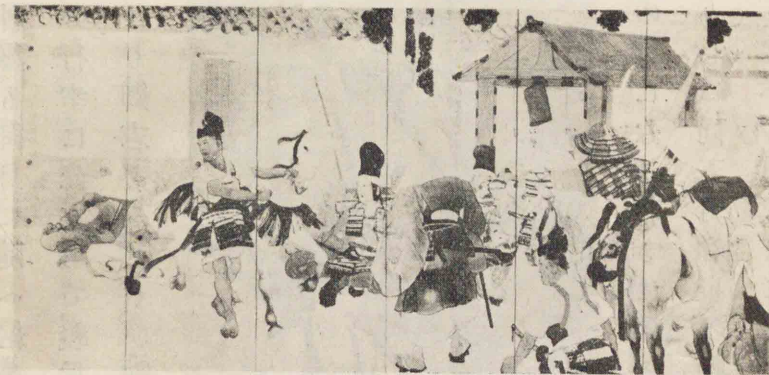


(一)京都府綾喜郡  
木津川南岸の  
小山幡宮が上  
八幡宮にあつ  
て、俗に八幡  
山、鳩峰など  
と呼んでゐる。

空しくさへな  
りぬ  
しいふばかりな

(二)源顯信。吉野  
朝の忠臣。正  
平年中戦死。

節度

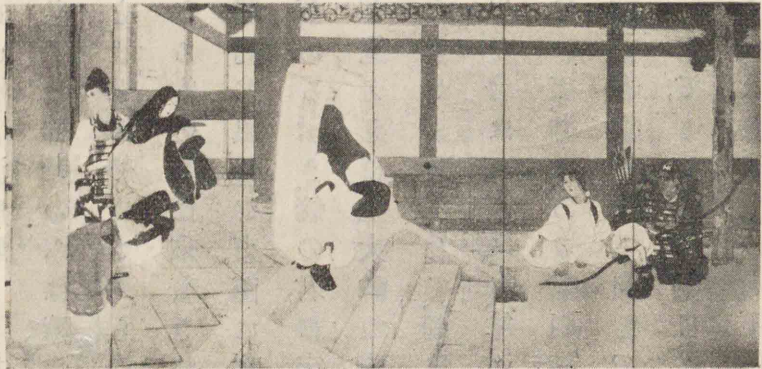


一のそ(筆雪關本橋) 幸遷御野吉

たゞ徒に名をのみぞ留めし。心うき世に  
もありしかな。官軍なほ心を勵まして、男  
山に陣を取りて、暫く合戦ありしかど、朝  
敵忍びて社壇を焼拂ひしより、事成らず  
して引退きぬ。北國なる義貞も、たびたび  
召されしかど上りあへず、させることな  
くて、空しくさへなりぬと聞えしかば、い  
ふばかりなし。  
さてしも止むべきならずとて、陸奥の  
皇子また東へ向かはしめ給ふべき定め  
あり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位  
に叙せられ、陸奥介鎮守將軍を兼ねしめ  
て遣されぬ。東國の官軍悉くかの節度に

儲の君

おどろおどろ  
しく  
(一)伊豆半島の最  
南端の一角。  
一名石廊岬。



二のそ(筆雪關本橋) 幸遷御野吉

從ふべき由を仰せられぬ。親王は儲の君  
に立たせ給ふべき旨申し聞かせ給ひて、  
道のほどもかたじけなかるべし。國にて  
はあらはさせ給へ。となん申されし、異母  
の御兄も數多ましましき。同母の御兄も  
前東宮恒良親王、成良親王ましますに、か  
く定まり給ひぬるも、天命なればかたじ  
けなし。七月の末つ方伊勢へ越えさせ給  
ひて、神宮に事の由を啓して、御船のよる  
ひし、九月の初め纜を解かれしに、十日餘  
りのこと、や、上總の地近くより空の氣  
色おどろおどろしく、海上荒くなりしか  
ば、また伊豆の崎といふ方に漂はれたる



(一)愛知縣知多郡の篠島。

(二)霞浦。

めづらか

(三)左中将道世。

こはし

(四)「ゆるがうちに見るをのみを夢といはんはかなき世をもつ」とは「古今集」壬生忠岑

に、いと波風夥しくなりて、數多の船行き方知らずなりにけるに、皇子の御船のみは障なく伊勢の海に着かせ給ひぬ。顯信朝臣はもとより御船にさぶらひけり。同じ風の紛れに、東をさして常陸の國なる内の海に來着きたる船ありき。方々に漂ひし中に、この二つの船、同じ風にて東西に吹分けられぬ。末の世にはめづらかなる例にぞあるべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御住居もいかがと覺えしに、皇大神の止め申させ給ひけるなるべし。後には吉野に入らせましたして、御目の前にて天位を嗣がせ給ひければ、いとど思ひ合はせられて、尊くもありしかな。また常陸は元より心ざす方なれば、御志ある輩相謀らひて、義兵こはくなりぬ。奥州野州の守も次の春重ねて下向して、各國に就きにき。さても八月の十日餘り六日にや、秋霧におかされさせ給ひて、かくれましましぬとぞ聞えし。寝るがうちなる夢の世、今に始めぬ習

(一)藤原經忠。正平七年薨、五十一

(二)第十四代。

(三)第十五代應神天皇。

宸襟

とは知りながら、かずかず目の前なる心地して、老の涙もかきあへねば、筆の迹さへ滞りぬ。かねて時をも覺らしめ給ひけるにや、前の夜より親王をば左大臣の第に遷し奉られて、三種の神器を傳へ申されぬ。後の號をば仰の儘にて、後醍醐の天皇と申す。昔仲哀天皇熊襲を攻めさせ給ひし時、行宮にて神去りましましき。されど神功皇后ほどなく三韓を平げ、諸皇子の亂を鎮められて、胎中の天皇の御代に定まりき。この君聖運ましまししかば、百七十餘年中絶えにし一統の天下を知らせ給ひて、御目の前にて日嗣を定めさせ給ひぬ。功もなく徳もなきぬすびと世に起りて、四年餘りがほど宸襟を惱まし、御世をすぐさせ給ひぬれば、御怨念の末空しくありなんや。今の御門また天照大神よりこの方の正統を受けましましぬれば、この御光に争ひ奉るものやはあるべき。なかなかなかくて靜まりぬべき時の運とぞ覺ゆる。

— 神皇正統記 —



七 ハンニバル

矢野龍溪

(一) 政治家、もと外交官。名は三嘉永三年(一八三〇年)豊後國に生れた。新嘉坡(シンガポール)の會館(コンベンション)の著者である。等語あり。

(二) Hannibal 古代北アフリカの都市カルタゴの英傑。西紀元前二四七年一八三年) 千古傷心のこ

と 畢生 終焉 人生室家の樂み

用兵の略

英雄の成敗には千古傷心のこと少からずと雖も、東西古今を通じて、ハンニバルの事の如く悲しきは非ざるなり。幼齡九歳の彼が、その父に伴なはれて神の卓前に立ち、國讐なるローマを畢生の敵とすべきを誓はしめられたるより、その終焉に至るまで、一念常に國讐を報ずるに非ざるものなし。彼は二十七歳、人生の花とも稱すべき時、大兵を帥ゐて敵國に侵入せしより、以來十六年、苦を兵間に積み、曾て人生室家の樂みを享けたる跡なし。大功成るに垂んとして果さず、ローマに窮追せられて、諸邦の朝廷に流寓し、遂に毒を仰いで斃る。嗚呼、人生の慘なる、またこの人の如きを見ざるなり。若し彼をして尋常人ならしめば、また深く悲しむに足るものなし。然れどもその用兵の略は優に古今名將の上に出で、外交に敏に

文弱人

非議

對峙

[Carthago.]



ルバニハ

政務に達し、賢に禮し、士に下り、學を好み、民を愛す。彼は武ありて文なき粗暴家に非ず、文ありて武なき文弱人に非ず。人格上一點の非議すべきところなく、而してその末路この如し。これ特に人をして傷心に勝へざらしむる所以なり。地中海を隔てて南北に對峙するものはローマ、カルタゴの二共和國なり。天は兩雄邦の並立を許さず、彼滅びずんば此興らず、彼衰へずんば此盛ならず。ローマは戰鬪を事とする尙武の民なり。カ人は貿易を主とする平和の民なり。カ人をして口兵と戰はしむるは、羊を驅つて狼に向かはしむるが如し。況やハンニバルの事に當りしは、既にその國が一たび痛撃を受



乃父

けたる後なるをや。本國人の頼むに足らざるを知り、乃父の遺志を繼いで兵を屬領に募り、これを以て強敵に當らんとす。事固より既に非なり。彼豈これを知らざらんや。知つて而してここに出づる、また實に勢の已むを得ざるものあればなり。

(一)佛國と西班牙との國境をなごる山脈

怨嗟

彼が志を決してスペインを發するに臨み、その兵殆ど十萬と號す。然れども、ピレネーの峻嶺を越え、アルプスの難路を過終へし時、その兵既に四分の一に減ず。彼がローマの北野に進みし時は、見兵僅かに二萬五千に過ぎざるなり。その途上に於て兵士の怨嗟を聞くや、彼は寛大にも軍中に令していはく、去らんと欲する者は去れ。従ふことを樂しむ者は來れ」と。この時に當りて將軍を棄てんとする者數千人なりきと雖も、なほ二萬餘の兵は死生を共にせんことを誓へり。而してその兵はスペイン及びゴール北部諸種の蠻族より組成せるもののみ。決してかの愛國心燃ゆるが如きロ兵の比に

[Gaul]

蕪雜烏合

(1) Alexander

(西曆紀元前三五六年) 前

(2) Frederick II

(西曆一七八六年)

懸絶

非ざるなり。蕪雜烏合のこの兵に對して、恩威の大なるものあるに非ざるよりは、いづくんぞよくかくの如くなるを得んや。古今偉功を奏せし將帥を見るに、その兵士は多く統一せる國民にして、愛國心ある者に非ざるはなし。たゞそれハンニバルに至つては即ち然らず。その將士はその將軍に對して、單に恩威を感じるのみ、實に愛國の要素を缺けり。この異様の兵を以て、かの將來印度以西を統一すべき運命を擔へる勇武絶倫、愛國無双のローマ人に敵對し、一たびは殆どこれを壓服せんとしたるなり。嗚呼、この人の外、千古またこの人あらんや。

ひとり人品のみならず、その戰鬥に長ずることもまた古今無双なり。アレキサンダー、フレデリク、ナポレオンと雖も、その上に出づるを得ず。これ余の私評に非ず、歐洲史家の通論なり。我が兵と敵兵と強弱勇怯既に懸絶せるのみならず、敵は毎に大兵にして、我は毎



奇戦 正戦  
(Cannae. 古代イタリヤ州の首府。紀元前二一六年ハンニバルは八萬の兵を以てこの地に破つた。)

潰敗

疲憊

款を送る

に寡兵なり。然るになほ奇戦には謀略を用ひ、正戦には戦術を用ふ。有名なるカンネの大戦を見よ。彼の兵數は敵軍の半ばにも當らざりしに非ずや。しかも堂々たる正戦に於て、彼は巧妙なる戦術を用ひ、敵軍をして七萬の死屍を戦地に遣して潰敗せしめたり。かくの如き全勝は、歴史上實に稀有のことなりとす。戦地に斃れたるローマ貴族の指より集めたる金の指環數斛を、彼の使が本國にもたらし歸りてこれを國會に示せる時、その國人の驚喜は幾何なりしぞ。この大勝に乗じて直ちにローマを衝かざりしは後人の憾むところなりと雖も、その兵やもと甚だ多からず、加ふるに戦後の疲憊を以てす。この危道を行かざるとも、一方にはイタリー南部の城邑は皆遙かに款を送る勢あり、彼を捨て此を取る、また理なしとせんや。この戦の夕、一部將が、我に三千の騎兵を與へよ。將軍の爲に直ちにローマを衝き、二日を出でずして軍をローマの城中に晩食せしめん。

獻策

操縦

と獻策せし時、既にその得失を知る、必ずしも後人の非議を待たざるなり。彼の國人は必要大切なる場合にも、曾て十分なる援兵を彼に送りしことなく、十分なる金穀を彼に與へしことなし。これ彼が十六年間敵國を蹂躪しながら、遂にその成功を最後に誤りし大原因なり。實に本國人民の罪にして、彼の罪に非ず。かくの如くにして彼は十六年間みづから兵を他國に募りてその缺を補へるのみならず、その金穀も毎にこれを敵國に取れり。その忍耐の大なる、またその智略と並行すといふべし。彼は善く戦へり。彼は巧に外交を操縦せり。然れどもその本國は却つて敵の侵入を防ぎ得ず、勢の救ふべからざるに及んで、彼を召喚してこれに當らしむ。嗚呼、また遅し。彼の智勇もこれを如何ともする能はず。しかもなほこの存亡の秋に在つて、敵と講和の約を結



小康  
釐革  
國帑  
急を緩め  
武辨

(1) Hædrubal.  
(西暦紀元前  
二〇七年)  
(2) カルタゴを指  
す。

久濶の喜

び、國人をして小康を得しめ、一方には財政を釐革し、一方には憲法を修正し、下層人民の愛國心を涵養し、國帑の急を緩め、莫大なる償金を年々支辨し得る途を畫策せり。彼豈尋常の一武辨ならんや。彼をして平時に出でしめば、必ずや治平の良宰相たらん。その未だ本國に召喚せられずして、ローマの野に轉戦するや、兵寡く、食謁く、恢復の望は、單にかゝりてその實弟ハスドルバルがスペインより援兵を率ゐて來り合するにありしなり。然るに天は衰邦に祚せず、彼の弟はイタリーの北野に破られ、彼が手を握りて久闊の喜を叙せんと樂しみたるその人の首級は、敵の槍鋒に貫かれて、遙かに彼が營前に現れたり。嗚呼、人生悲慘のこと多しと雖も、未だこの人のこの時の如きは非ざるなり。彼が遙かに弟の首級を望みける時、今我カルタゴの運命を知れり。歎ぜし一言は、いかに無限の悲痛を含みしぞ。尋常骨肉の情よ

(一) 唐の詩人杜甫の句。  
(二) 陝西省鳳翔縣の地名、諸葛亮の本營のあった所。  
(三) 諸葛亮。字は孔明。蜀漢の忠臣。  
黥文  
(四) 今の浙江省の杭州府。  
(五) 岳飛。宋の忠臣。

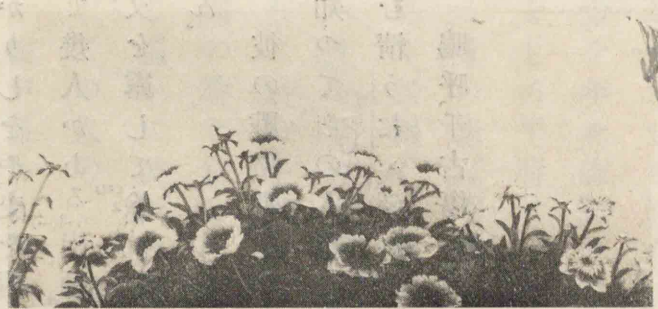
りするもなほ忍ぶ能はず。況や自國の興亡はこの援軍の勝敗にかかりしをや。史を讀んでここに至り、卷を掩うて長歎せざる者果して幾人かある。出師未捷身先死、五丈原頭の武侯や、盡忠報國の黥文を露して餘杭の市に斬られし岳武穆も、また何ぞ比するに足らん。彼の戰略戰術が人目を眩耀するが爲に、人或はその名將たるを知つてその人格を察せず。若し能くこれを究めば、その不幸を悲しむ情うたゝ深きを加へん。嗚呼、千古傷心のこと、實にこの人の人生の如きは非ざるなり。

——出鱈目の記——



(一) 詩人、小説家。大谷大學教授。明治十九年生。鹿兒島縣に生まれた。半屋の著者である。  
(二) Anemone.

絢爛



(筆爾觀林小) くやくやし

八 五月の太陽

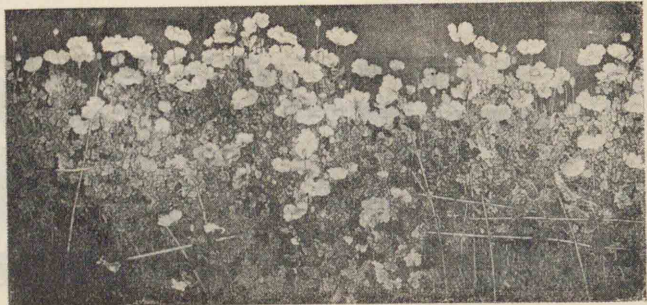
萬造寺 齊

初夏

もうアネモネは盛りを過ぎ、  
たんぼの花も終りに近づき、  
今絢爛たる芍薬と、火焰の如き  
けしの季節。  
見わたす京都の郊外は目覚め  
るばかり新緑に輝き、  
花の匂、若葉の匂、土の匂、肥料の  
匂、  
そのほか無数の名状し難い微

馥郁

(一) 京都府葛野郡花園村。  
(二) 同太秦村。  
(三) 同嵯峨町一帯をいふ。



(筆山司田宮) しけ

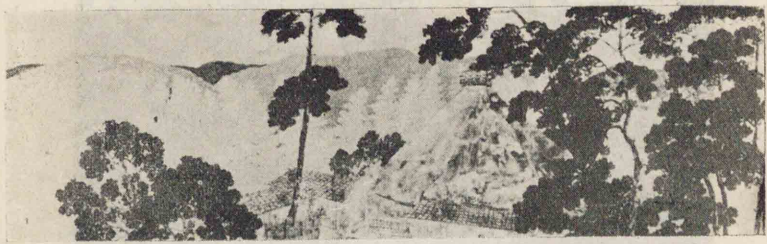
妙な匂が

馥郁として大地を蔽ふ。

(一) 花園、(二) 太秦、(三) 嵯峨嵐山……

林を横ぎり、  
小川を渡り、  
若草を踏み、  
木蔭にいこひ、  
人家の間を通りぬけつゝ、  
白いぼこりつばい田舎道を  
足にまかせて杖をひけば、  
五月の大氣の柔かさ、  
五月の日光の暖かさ、





(筆郊雨林小) 哦 嵯

五月の微風の芳しき。  
 名のない路傍の雑草も時を得顔  
 に蔓延し、  
 飽くまで榮養を吸収しつゝ成長  
 を急ぐ牛蒡、豌豆。  
 柔かい、みづみづしい豊熟に近い  
 一面の穂麥。  
 樹木の繁茂。  
 雲雀の狂喜。  
 昆虫の飛翔。  
 重疊しつゝ起伏しつゝ地平を限  
 る緑の連山。

交感

奔放

南へ急ぐ溪流の喜び勇む不斷の跳躍……  
 大地はうごめく。  
 自然の胸は激しく波打つ。  
 (私は神秘的な交感により、自分の全身全靈にその力  
 強い脈搏を、その快い體温をその芳しい呼吸を感  
 ずる。)  
 創造するもの、成長するもの、  
 醗酵するもの、の奔放な精神、  
 その憧憬と情熱と、  
 その憤激と昂奮とは、  
 息づまるほどあたりに充ち満ち  
 洪水のごとくあたりに渦巻く。



表紙

陶酔

私は大きく胸を張り、  
 濁いたものの慾深さで、  
 あたりに漲る五月の靈氣を、  
 自然の無量のいのちを吸ひこむ。  
 (あゝ、喜ばしいこの若がへり。)

私の眼は 奮に輝き、  
 私の血は陶酔に燃え、  
 私のいのちは健康に溢れ、  
 私はすべての成長するものと、  
 すべての歡喜し陶酔するものと  
 共に五月の太陽を、  
 その永久の光耀を讃へる。

九 山の五月

前田夕暮

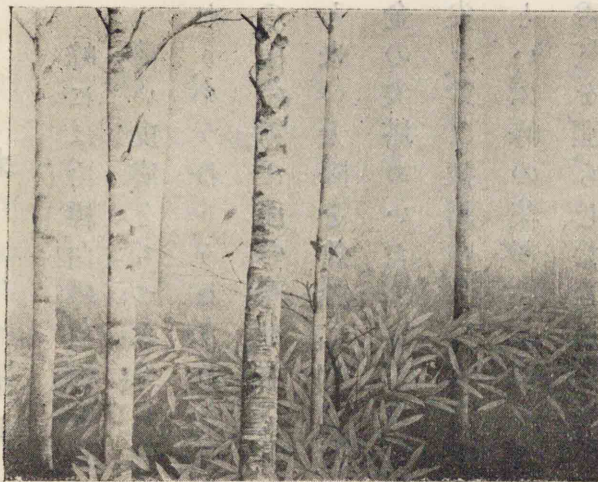
(一) 歌人。名は洋  
 造。明治十六  
 年。神奈川県  
 生まれ。前  
 田夕暮集。  
 生林。著  
 話等の著  
 話等の著  
 話等の著

地肌

峰には白樺。白樺。白樺の列。谷には青檜。青檜。青檜の層。  
 薄い皮膚をもつた五月の青空は、ひたひたと山の秀に觸れ、大う  
 ねり、小うねり、うねうねと幅の廣い波を疊んでゐる山、山、山、山、山。そ  
 の山の秀に、山の秀が並び、山の尾根に山の尾根が重なり、ほつちり  
 と朱い太陽を焦點にして、西から東から、南から北から、遠方には白  
 金の尖塔めいた雪を光らせ、近くは緒熊の寢姿であり、黒狐の耳の  
 尖り、或は裸馬の背であるところの山といふ山、尾根といふ尾根、峰  
 といふ峰の集りの上に、まだ雪の匂ひの沁みてゐる白石楠の花の  
 香氣を漲らした五月の空がひたひたと脈うつて、大ひろがりにひ  
 るがつてゐる。それ等一大波状をなした山々の峰といふ峰、尾根と  
 いふ尾根の地肌から、煌々として光のかたまりをなして叢生する



白樺の群落だ。さながら神経のやうに白く、銀髪のやうに耀き、ざく  
りと切り殺いだ山蔭はさながら氷柱の群がりである。



ざわ、ざわ、ざわとなる葉の音。きら、きら、きらと光る葉の光。

白樺の林の、或は蛇行状に、時には環状線を描いて、深く喰入り、深く流れ、さうさうとして走り、集る線といふ線、巒といふ巒の集成するもの、そこに大地断層を現して、谿谷となる。その谷々の岸に、断崖に、斜層に群生する素晴らしい青檜の層である。

葉といふ葉は雨あとのつやつやした照りを放つて、五月の冷たい朝風に吹きあふられて、ざわめき、ざわめく。それは葉といふ活字を、打開かれた菊倍版の二頁に一面に黒く、青くばら撒いた光彩である。そして光といふ葉の光は菊倍版のその頁の上にはばら撒かれた活字の切断面の光であり、光の交錯であり、錯乱であり、動亂であり、飛躍であり、舞踏であり、長驅であり、狂奔である。

山の五月は村落の四月である。春である。春も寧ろ早春の気分である。雪が屋根に消えた許りの懐かしい湿と匂を草や木に感ずる季節である。この頃になると原生林に細々と幽かに現れる國境越えの山路を、峠を越して遙々と旅藝人の群が谿谷にながれてくる。其彼等の一群は、旅役者であり、どうかすると貧しい曲馬團であつたりする。足を傷めた旅役者の蒼白い一群は、製材工場の一隅に、曲馬團の油畫の一團は、伐採事務所に、或は人夫小舎になだれ込む。そ



殺到

れまでしんとして静まりかへり凍てついてゐた谿谷の一部落は、忽ちにして檜の葉のやうにざわめき出す。そして向うの谷合、東の林層、南の伐採地、西側の植林地帯のそれから、さつさつといふやうに殺到する。

さあ山は遽かに活氣づき生きかへりはねかへる。そして、そこに忽ちにして山の五月の祭があげられる。

はためく

青く冷たい光の檜の葉むらの中に、淺葱幟が二本、四本、六本、八本と立てられる。幟ははたはたと朝風にはためき、そして、忽ちにして、廣い製材工場は舞臺に變化せられ、集伐場の廣場は整理せられて、そこに空色の幕がはられ、赤い吹きながしの旗、旗、旗の風景である。おおいと大きな聲をあげて誰か向う山の林道を驅下りてくる。そのあとを斑の仔馬がびよんびよんとはねて出る。あとから、あとから子供だ、柚だ、女だ、樫曳だ、伐採夫だ、炭焼だ、トロ押した、馬子だ、木

喇唳

地屋だ、土工だ、犬だ、それ等の影、影、影の重なり、羅列、進行、殺到である。と思ふと、南の尾根には白いおろしたての手拭を被つた娘の行列が、さながら茅花の穂のやうに白々と並んでくる。そのあとから誰か紙の日の丸の旗をたててくる。

水準

さて谷底では曲馬團の調子外れの樂隊の喇唳と響き、旅役者の芝居の人寄せの太鼓の音がとうとうとして鳴りわたり、谷川の雪解水ゆきげみづは平水の五倍六倍に水準を高めて、青々とした雪折れの杉の枝や樅の木を流してくる。

峰には白樺の光、その白樺は空の色がひたひたと觸れ、谷には青、青の濡れ葉の層の檜といふ檜のざわめき、幟のはためき、そして、向うの林道からの歡聲、歡聲、歡聲の放射、南の尾根からは白手拭の娘子軍の野性の唄聲、これらの色と光と聲との一大交響樂が、ひとかたまりになつて、歡天喜地の山の五月の祭が始まるのである。



(一)鎌倉末期の文學者。また當時歌界の四天王の第一。正平十八年(一一八七)著は徒然草。  
 (二)京都市の西郊花園にある。宇多法皇の創建。俗に御室といふ。  
 (三)共に石清水寺末社。  
 (四)かちより詣づかばかり

本意



舞のへなか 一のそ (筆 郵青田前)

一〇 仁和寺の法師

吉田兼好

一 石清水

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心憂くおぼえて、或時思ひたちて、ただ一人かちより詣でけり。極樂寺、高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて、かたへの人に逢ひて、年比思ひつることは、たしはべりぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも参りたる人毎に山へ登りしは、何事かありけん。ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。とぞいひける。少しのことも先達はあらまほしきことなり。

二 かなへ

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名残とて、おのおの遊ぶことありけるに、酔ひて興に入る餘り、かたへなる足鼎をとりて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔を差入れて舞出でたるに、満座興に入ることに限りなし。しばし奏でて後ぬかんとするに、おほかたぬかれず、酒宴ことさめて、いかがはせんと惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて息もつまりければ、うち割らんとすれど、たやすく割れず、響きて堪難かりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子をうち掛けて、手をひき、

かづく

たゞ腫れに腫る



舞のへなか 三のそ (筆 郵青田前)



が  
り  
行  
く  
く  
ど  
も  
り  
聲

杖をつかせて、京なる醫師のがりゐて行きけるに、途すがら人の怪しみ見ること限りなし。醫師の許に差入りて、向かひゐたりけん有様、さこそ異様なりけめ。ものをいふにも、くどもり聲に響きて聞えず。かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなしといへば、また仁和寺に歸りて親しきもの、老いたる母など枕上に寄りゐて泣悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝるほどに、或者のいふやうは、たとひ耳鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなにか生きざらん。力をたてて引き給へ。とて、藁のしべをまはりに差入れて、かねを隔てて、首もちぎるゝばかり引きたるに、耳鼻かけうげながらぬけにけり。からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。

一一 箱王仇に遇ふ

かくて箱王は、御奉幣の時までも人一人も連れず、介錯の僧一人

介錯  
河津祐泰の子  
曾我五郎時致  
の小学祐泰  
は工藤祐経に  
殺され、母は  
曾我の太郎祐  
信に再嫁した  
ので、五郎は  
當時箱根権現  
僧行實の弟子  
となつてゐた。

(一) 工藤祐経、叔父伊東祐親を殺した。

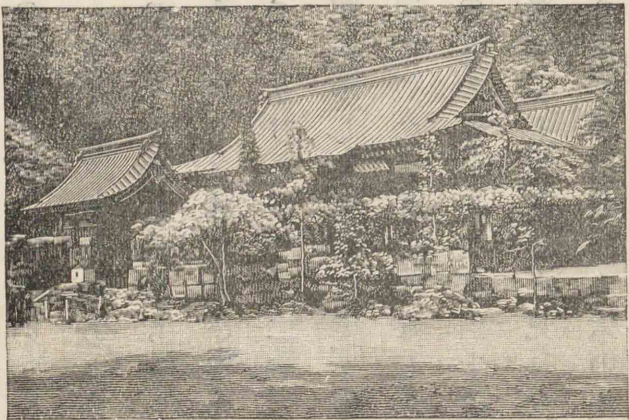
(二) 源頼朝。

(三) 島山重忠、武藏國秩父の豪族。

(四) 和田義盛、相模國三浦の豪族。

(五) 里見義成。

めて



箱根神社

相具し、御座所の後に隠れるて、御供の人々を、彼はたぞ。此はいかに。と委しく問ひければ、この僧鎌倉の案内者にて、大名、小名の名よく知りたれば、教へけり。されどもいまだ祐経をば明かさず。あはれ問はばやとは思へども、怪しく思はれじとて、残りの人を問廻す。君の左の一の座はたぞ。彼こそ秩父の重忠よ。右の一の座はいかに。これぞ三浦の義盛なる。さてその次はたぞ。里見の源太といふ人よ。さてその次は。豊島の冠者といふ人なり。たゞ今もの仰せらるゝは誰やらん。これこそは當時聞ゆる梶原平三景時とて、さぶらひどもの鬼神に思ふものよ。まためての方少し引きのき



(一)祐泰は伊豆の河津を領してゐたのでこれを姓とした。

て半装束の珠數持ちて香の直垂着たるはいかなる人にてあるやらん。かれこそ御分たちの一門伊東のぬし工藤左衛門祐經よ。御分の父河津殿とは従弟なり。御前さらぬきりもの。とぞ教へける。さてはそれにてありけるよ。この事思ひ寄りていふやらん。知りぬれども何事かあらんと、思ひこなしていふやらんと、いつしか胸うち騒ぎけれど、思ひ寄らざるさまにて、このものはよきをのこにてありけるや。三十二三にぞなるらん。みづからが父にや似たる。と問ふ。少しも似給はず。まさしき兄弟さへ似たるは少し。まして従兄弟に似たるものはなし。年こそ河津殿の討たれ給ひしほどなれ。その人のましまさば、四十餘りにてあるべし。これより遙かに丈高く骨太くして、前より見れば胸そり、うしろより見ればうつぶき、側より見れば四角なる大の男にてましまししが、馬の上、かちだち並ぶ人なし。殊にし、の上手にて、力の強き事四五個國にはならびなき

かちだち

(一)大庭景親  
(二)天城山の麓  
狩場

大力なり。されば相模の國の住人、大庭の三郎が弟、俣野の五郎景久とて、相撲に負けざる大力を、伊豆の奥野の狩場にて、片手を放ちてすまふに、三番勝ちてこそ、いとど名を揚げ給ひしが、それを最後にて、歸りざまにあへなく討たれ給ひき。大力と申せども、死の途には力及ばず。とぞ語りける。箱王は父が昔をつくづくと聽きて、今更なる心地して、忍びの涙に咽せびけり。

や、ありて、我このあひだ祈りし願のかなふにこそあるべけれ。窺ひ寄りて、便宜よくば一刀刺し、いかにもならんと思ひ定めて、御坊はこれにまします。法師こそ寄らね、わらんべは近く寄りても苦しからず。山寺に住めばとて、人を見知らぬはむげなり。近く寄りて見知らん。とて、赤地の錦にて柄鞆巻きたる守刀を脇にさし隠し、大衆の中をぬけ出でて、祐經がうしろ近くぞ狙ひ寄りける。祐經もしばしの冥加やありけん、梶原三郎兵衛を隔てて箱王を見つけて、こ

むげ

冥加



まなごさし

まほる

念誦

れなるわらんべは、まなごさし河津の三郎に似たるものかな。誠やこの御山には、伊東が孫のありと聞けば、若しこれにてやあるらんと、目を放さずまぼりければ、さうなく寄らざりけり。

祐經なほよくよく見れば、まなこの見返し、顔だましひ、少しも違ふところなし。祐經は念誦はてて後、大衆の中へ立入つて、伊東入道が孫この御山に候ふと聞く。いくの坊に候ふぞや。名をば何と申すぞ。と問ひければ、或僧申すやう、御名をば箱王殿と申して、別當の坊にましまし候。この頃は里に候ふか。これに候ふか。と問ひければ、「これにこそ。とて、東西を見めぐらし、長絹の直垂に、松に藤を縫うて、萌葱の絲にて菊綴して、こなた向に立ち給ふこそ。」と教へけり。さればこそと思ひ、もとの座に歸り、箱王を招きければ、願ふところと喜びて、祐經が膝近く寄添ひけり。左の手にて箱王が肩を抑へ、右の手にて髪を搔撫でて、あつはれ父に似給ふものかな。今まで見奉らざ

方人

ることの本意なさよ。わ殿は河津殿の子息と聞くは眞か。兄は男になり給ふか。曾我の太郎はいとほしくあたり奉るか。知らざるもの、馴々しくかやうに申すとばし思ひ給ふな。御分の父河津殿とは従兄弟なり。殿ばらにも親しきものとは祐經ばかりなり。見奉れば昔の思ひ出でられて、今更あはれに存ずるぞ。急ぎ法師になり、別當につき給へ。弟子多しといふとも、祐經ほどの方人もちたる人あらじ。便宜をもつて上さまへもよきやうに申し、師門の訴訟あらば申し立つべし。今より後はいかなる大事なりとも、心をおかず仰せられよ。かなへて奉るべし。わ殿の兄にもかやうに申すと傳へ給へ。父にも添はで、いかに便なくましますらん。むかばき、乗馬などの用の時は承るべし。身貧にして他人に交らんよりは、親しければ常に訪ひ給へ。まことや古き語に、貴きは賤しきが嫉み、智者をば愚人が憎む。罪障は千載に消えず、報は千劫に絶えずと申し傳へたり。さて



引出物

こがひな

率爾

も見參の初に、をりふし引出物こそなければ。また空しからんも無念なり。これを、とて、懷より赤木の柄に胴金入つたる刀一腰取出し、箱王にこそ取らせけれ。何となく受取れども、箱王は涙に咽せびけり。便宜よくば一刀刺さんと思へども、目を放さず、その上、大の男の、常に肩に手を置きければなまじひなる事をし。だして、こがひな取られて人に笑はれじと、思ひ止りぬ。たゞいふこととては、さん候とばかりなり。率爾の見參こそ所存の外なれ。さりながら喜び入り存じ候。里下りの序には、わ殿の兄十郎殿とうち連れて來り候へ。返す返す、といひて立ちにけり。箱王力及ばず止りぬ。

—曾我物語—

一一一 白河殿夜討

(一)頼長

白河殿にはかくとも知らしめさざりしかば、左大臣殿武者所の親久を召されて、内裏のさま見て參れ。と仰せければ、親久即ち馳歸

除目

物騒

官軍  
除目  
物騒

り、官軍すでに寄せ候。と申しもはてぬに、先陣すでに馳來る。その時鎮西八郎申しけるは、爲朝が干たび申しつるは、ここの候。ここの候。と怒りけれども、力及ばず。爲朝を勇ません爲にや、俄に除目行はれて、藏人たるべき由仰せけり。八郎、これは何といふことぞ。敵すでに寄せ來たる、方々の手分をこそせられんずれ。たゞ今の除目物騒なり。人は何にもなり給へ。爲朝は今日の藏人と呼ばれても何かせん、ただもとの鎮西八郎にて候はん。とぞ申しける。

安藝守清盛は三條を河原へうち出で、筋違に東河原にうち渡り、堤を上りに、北へ向かつてぞ歩ませける。その勢の中より、五十騎許り先陣に進んで押寄せたり。こゝを固め給ふは誰人ぞ。名のらせ給へ。かく申すは、安藝守殿の郎等に、伊勢國の住人古市伊藤武者景綱同じき伊藤五、伊藤六。とぞ名のりける。八郎これを聞き、汝が主の清盛をだに合はぬ敵と思ふなり。平家は、柏原天皇の御末なれども、時

郎等  
合はぬ敵  
(一)第五十代桓武  
天皇 柏原陵  
に葬りよつ  
て柏原天皇と  
も申す



(一)第五十六代。  
(二)源經基のこと。  
清和天皇第六  
の皇子貞純親  
王の長子。故  
にいふ。  
(三)源義家。

裏かく

代久しくなり下れり。源氏は誰かは知らぬ。清和天皇より爲朝まで  
は九代なり。六孫王より七代、八幡殿の孫六條判官爲義が八男、鎮西  
八郎爲朝ぞ。景綱ならば引退け。とぞ宣ひける。  
景綱昔より源平兩家天下の武將として、違勅の輩を討つに、兩家  
の郎等大將を射ること互にこれあり。同じ郎等ながら、公家にも知  
られまゐらせたる身なり。下藤の射る矢立つか立たぬか御覽ぜよ。  
とて、よつ引いて射たれども、爲朝これをことともせず、合はぬ敵と  
思へども、汝が言葉の優しきに、矢一つ賜はらん、受けて見よ。かつは  
今生の面目、または後生の思出にもせよ。とて、三年竹の節近なるを  
少し押磨いて、山鳥の尾を以てはぎたるに、七寸五分の丸根の篋中  
過ぎて篋代のあるをうち食はせ、暫し保つてひやうと射る。眞先に  
進んだる伊藤六が胸板かけず射通し、餘る矢が伊藤五が射向の袖  
に裏かいてぞ立つたりける。六郎はやにはに落ちて死にたりけり。

舌を振ふ

(一)清原武則。

伊藤五この矢を折りかけて、大將軍の前に參つて、八郎御曹司の  
矢御覽候へ。凡夫の所爲とも覺え候はず。六郎すでに死に候ひぬ。と  
申せば、安藝守をはじめて、この矢を見る兵ども、皆舌を振つてぞ恐  
れける。景綱申しけるは、彼の先祖八幡殿、後三年の合戦の時、出羽國  
金澤の城にて、武則が申しけるは、君の御矢に中るもの、鎧兜を射通  
されずといふことなし。抑、君の御弓勢を確かに拜み奉らばや。と望  
みければ、義家、革よき鎧三領重ね、木の枝にかけて、六重を射通し給  
ひければ、鬼神の變化とぞ恐れける。これより愈、兵ども歸服しけり  
と申し傳へて聞けば、かりなり。眼前にかゝる弓勢もはべるにや、あ  
な怖し。とぞおぢあへる。  
かく口々にいはれて、大將宣ひけるは、必ず清盛がこの門を承つ  
て向かひたるにもあらず。何となく押寄せたるにてこそあれ。何方  
へも寄せよかし。さらば東の門か。とあれば、兵皆、それもこの門近く



候へば、若し同じ人や固めて候ふらん。たゞ北の門へ向かはせ給へ。といへば、さもいはれたり。今はほどなく夜も明けなんぞ。然れば小勢に大勢驅立てられんも見苦しかりなん。とて引退くところに、嫡子中務少輔重盛、生年十九歳、赤地錦の直垂に、澤瀉緘の鎧に、白星の兜を着、二十四差したる中黒の矢負ひ、二所籐の弓持つて、黄河原毛なる馬に乗り、進み出でて、勅命を蒙つてまかり向かひたるものが、敵陣こはしとて引返すやうやあるべき。續けや若者ども。とて驅出でけるを、清盛これを見て、有るべうもなし。あれ制せよものども。爲朝が弓勢は目に見えたることぞかし。過すな。と宣ひければ、兵ども前に馳塞がりけるに、力なく、京極を上りに、春日表の門へぞ寄せられける。

剛のもの

ここに安藝守の郎等に、伊賀國の住人山田小三郎伊行といふは、またなき剛のもの、かたかは破りの猪武者なるが、大將軍の引き給

をこの高名

ふを見て、さればとて矢一筋に恐れて、向かひたる陣を引くことやある。たとひ筑紫の八郎殿の矢なりとも、伊行が鎧はよも通らじ。五代傳へて軍に遭ふこと十五個度、わが手に取つても、たびたび多くの矢どもを受けしかど、いまだ裏をばかぬものを、人々見給へ、八郎殿の矢一つ受けて物語にせん。とて驅出づれば、この高名はせぬに如かず。無益なり。と同僚ども制すれども、元よりいひつる言葉をかへさぬ男にて、夜明けて後に傍輩のいひで八郎の矢目見ん。といはんには、何とかその時答ふべき。されば日頃の高名も失せなん。ことの無念なれば、よしよし人は續かずとも、おのれ證人に立つべし。とて、下人一人相具して、黒革緘の鎧に、同じ毛の五枚兜を猪頸に着、十八差したる染羽の矢負ひ、塗籠籐の弓持ち、鹿毛なる馬に黒鞍置いて乗つたりけり。



一定

伊賀國の住人山田小三郎伊行生年二十八公家にも知られ奉りし山田莊司行末が孫なり山賊強盜をからめ取ることは數を知らず合戦の場にもたびたびに及んで高名仕つたるものぞかし承り及ぶ八郎御曹司を一目見奉らばや」と申しければ爲朝一定きやつは引設けてぞいふらん一の矢をば射させんず二の矢を番はんところを射落さんず」と宣ひて白蘆毛なる馬に金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが驅出でて鎮西八郎これに在り」と名のり給ふところを元より引設けたる矢なれば弦音高く切つて放つ御曹司の弓手の草摺を縫ひざまにぞ射切つたる一の矢を射損じて二の矢を番ふところを爲朝よつ引いてひやうと射る山田小三郎が鞍の前輪より鎧の草摺尻輪かけて矢先三寸餘りぞ射通したる暫しは矢にがせがれて溜るやうにぞ見えし即ち弓手の方へ眞逆さまに落ちけるに、鏃は鞍に留つて馬は河原へ馳行けば下人つと馳寄り主を肩

縫ひざま

に引懸けて身方の陣へぞ歸りける寄手の兵これを見て愈この門に向かふものこそなかりけれ

—保元物語—

自修文

保元の花

額田六福

(一) 劇作家、明治二十三年、岡山縣に生まれ、心中、戦等の著がある

「あ、鎧が……鎧が……」

六條判官爲義は空を見つめて呻くやうに叫んだ。

月數、日數源太が産衣、八龍、澤瀉、薄金、楯無、膝丸と、八領の鎧には

それぞれにゆかしい名が與へられてゐた。祖先八幡太郎以來、源氏の家に取つては重代相傳の重寶であつた。爲義初め家の子郎等は、出るにも入るにも、必ず奥の一間に飾つたそれを禮拜するのがおきてであつた。

それは保元元年七月九日の黄昏時であつた宿願の筋があつて石清水の八幡宮に參詣して戻つた爲義は、いつものやうに奥の一間へはいつて行つた。と、忽ち一陣の狂風が軒を裂くやうに

宿願

前から願つてあること

(二) 京都府綾喜郡八幡町男山の頂に鎮座、男山八幡ともいふ。

一陣

ひとさかり、ひとしきり。

保元の花(自修文)

七五



して吹起ると、こはいかに、重さ何十斤の鎧が、一つ一つ枯葉のやうに空へ巻上げられた。

「あゝ。」

さすがにものに動ぜぬ老武者も、思はず驚愕の聲を立てた。途端、俄に風が止むと、舞つてゐた鎧は、胡蝶のやうに八方へ消えてしまつた。

「夢か……。」

爲義ははつとその時轉寢の夢から醒めた。急いで瞳をうつすと、床の間には八領の鎧が、緘の糸一筋そよがせもせず、石のやうに重々しく並んでゐた。

「あゝ。」

爲義はほつとして、額の汗を拭つた。と、その時敷居越しに家來の一人がうづくまつた。

「白河殿から左京大夫殿がお越しになりました。」

驚愕  
にはかの事に  
あつて、心の  
みだれおどろ  
くこと。  
途端  
ちやうどその  
時

(一)白河法皇の御  
所をいふ、白  
河院ともいふ。  
京都市三條通  
の北にあつた。

(一)第七十四代。

(二)後白河天皇の  
御座所。

(三)崇徳院。

御掟  
貴人のおほせ

爲義の顔は見る見るうちに土のやうに變つた。

保元元年七月二日に天下の歎を一つに集めて、鳥羽上皇が崩御になつた後の世には、遂に痛ましい戦の血を見ねばならなくなつた。

平清盛、源義朝、その他幾十騎は、まづ招かれて高松殿へ参つた。然し、新院方には清盛の叔父平馬助忠正の外、名ある武士とはなかつた。で、

「あの爲義こそ。」と、やがてお召しの院宣が下つた。

「御掟、身に餘る面目とは存じながら……。」

爲義の返事は澁つた。彼はわが子義朝のことを思ひ續けた。然し、新院からの使は火のやうに激しく、武士の身としてはこの上ことわりきれなかつた。

「お身方に参つて候。」

爲義は齒を食ひしめて答へた。八領の鎧の中、最も優れて見事



な膝丸と産衣とを家來の花澤に持たせて、義朝の邸へ送らせた。たゞ一人敵となる子に……父の心はいはうやうなく、哀深かつた。

爲義は薄金を身につけた。残る五領は四郎頼賢以下五人の子供に分けて着せた。たゞ八郎爲朝は七尺豊かな大男故、どの鎧も身に合はなかつた。八龍に似せた大荒目をうちかけた。然し、武者ぶりをさをさ兄どもに後れなかつた。

爲義は六人の子を連れて、遂に白河殿へ伺候した。白河殿はまたの名を北殿ともいつた。南の大炊御門表、東の門は平馬助忠正が承つて、父子五人で固めた。西の門は爲義が父子六人して守つた。北の春日表の門は左衛門大夫家弘が子息と共に固めた。たゞ爲朝ばかりは親兄弟には引別れて、僅かの手兵で西河原の門をさし固めた。爲朝その日のいでたちは、紺地にいろいろの糸を以て獅子の

(一)五郎頼仲、六郎爲成、九郎爲仲

大荒目 鎧の札を大きく荒く、その間を荒く緘したので、この名がある。をさをさをさ

(二)忠正、長盛、忠綱、正綱、通正の五人  
(三)平家弘、下野判官代正弘の子、左衛門大夫は衛門府の尉で五位に叙せられたもの  
(四)西にあたる賀茂河原の方へ向いた門  
(五)獅子の形を丸くした模様

直垂 ここは鎧の下に着る直垂をいふ

尻鞆 虎熊などの皮で作つて鞆にかける袋  
五人張の弓 四人で弓を押曲げ他の一人が弦をかけるほどの強弓  
(一)漢の高祖の臣沛の人。沛公に從つてその偉業を成さしめた

悵然 うらみなげくさま

丸を縫つた直垂に、白の唐綾で緘した大荒目の鎧をつけ、三尺五寸の太刀に熊の皮の尻鞆を入れ、五人張の弓に三十六さした黒羽の矢を負ひ、胄はわざと脱いで郎等に持たせ、悠々と歩み出た。有様は、古の樊噲もかくやとしのばれて、雄々しくも勇ましかつた。謀はと問はれて彼は一禮して、左大臣頼長にいつた、  
「さん候。戦はいづれにせよ、夜討に如くものはござりませぬ。今より直ちに高松殿に押寄せ、三方に火を放ち、一方より攻めつけば、火を逃れんものは矢先にかゝり、矢先をのがれんとすれば、火に焼かれて、戦は忽ち身方の勝利と相成申さん」と、よどまずに申し立てた。武士たちは皆同意したが、頼長の心は傲つてゐた。彼は敵を侮つてゐた。華美を好む彼には、むさくるしげな夜討などは、思ひも寄らなかつた。  
「それは汝等同士が十騎廿騎の私事、夜討なんどはことの外なり」と、苦りきつて拒んだ。爲朝は悵然として御前をさがつた。



「あゝ、すべては終りだ。兄義朝は智謀にたけたもの故、必ず今宵夜討をかけるであらう。」と歎息した。彼の目には痛ましく破れて行く身方の最後が、ありありと幻まぼろしに浮かんだ。

その時高松殿でも軍議がこらされてゐた。義朝は案の定ぢやう夜討の策を獻じた。少納言信西しんせいははたと膝を打つて、武藝のことは武士に委せらるべし。とて、直ちにその議を納れ、同勢すぐつて一千七百餘騎、黒雲の渦巻く如く白河殿へ押寄せて來た。

「すはや。」

不意を討たれた新院の驚は言語に絶えた。頼長は急に爲朝を藏人にするといつて、力づけようとした。爲朝はあざ笑つて、敵すでに寄する上は、方々の手分こそ肝要なれ。人々はいづれにもなり給へ。爲朝は元の鎮西八郎にて候はん。といひきると、持口もちぐちさしてまつしぐらに驅けつけた。その寄手の大將は清盛であつた。その中から一人陣頭に進

案の定  
思つた通り。  
〔藤原信西〕

持口  
受持の場所。

んで、

「この所を固め給ふは誰人ぞ、かく申すは古市伊藤武者景綱、同じき伊藤五、伊藤六。」と名のつた。八郎はそれを聞いて、

「八幡殿の孫、六條判官爲義が八男爲朝ぞ。退け。」と叱つた。景綱は怒つて、

〔近江國と伊賀國とに跨がつてゐる。東國險要の地。〕

「われは鈴鹿山にて強盜の張本をからめて、公家にも知られたるもの。下藪の矢立つか立たぬか御覽せられよ。」と、よつ引いて射かけたが、爲朝はものともせず、  
「合はぬ敵と思へども、汝が言葉の優しさに矢一つ給はる。受けて見よ。」と、三年竹の節近なのに山鳥の羽をはいだ矢を十分にくはせて、暫し狙を定めてひやうと射ると、眞先に進んだ伊藤六が胸板を薄紙のやうに射ぬいて、餘る矢先は後の伊藤五の鎧の袖に裏まで通して立つた。伊藤五は色を失つて、その矢を折つて清盛に見せた。



「お。」  
鬼神の業に清盛は急に水を浴びたやうにぞつとした。そして俄に東から北へ引いて、逃去つた。

夜はほのぼのと明けそめた。河原に屯してゐた下野守義朝の兵は、清盛破れたりと見て、まつしぐらに西河原をさして驅向かつた。義朝は陣頭に立つて、

「清和天皇九代の後胤下野守義朝、大將軍の勅命を蒙つてまかり向かふ。若し一家の氏族たらば速に陣を開いて退散せよ。」と大音に呼ばはつた。爲朝はにっこり笑つて、側の家來を顧て、

「敵は大勢なり。若し矢種つきて打物になるならば、一騎が百騎に向かふとも遂にはかなふまじい。で大將に矢風を負はせて引きのけん。」といつた。

「實にも。」家來はすぐになづいたが、またうれはしげに、なれども、若し誤つて兄君に怪我させられては。」

矢風を負はず射す矢の勢におそれさせる意  
うれはしげにしんばいさうに

存じつらうに知つて居らうに

「愚かなり。爲朝の手並は存じつらうに。」と、例の大矢を番へると、引絞つてひやうと射た。思ふ矢壺はあやまたず、義朝の胃の星を射けづつて、餘りの矢は後の寶莊嚴院の門の柱に根深く埋めて立つた。義朝は笑つた。

「聞きしにも似ず手練の足らぬことよ。」  
「や。」

爲朝は赫となつた。兄にてわたらせ給ふな。存ずる旨あつてかくは仕り候へども、まことにお許を蒙らば、御望の矢奉らん。」といひもあへず、二の矢をきり、と引絞つた。

「あはや。」

それと見て深巢七郎清國が駒を馳せて、義朝の前に立塞がつた。爲朝はそれを弓手に狙ひ定めてひやうと射た。清國は胃の三の板より筋違に左の小耳の根へ、篋中ばかり射こまれて、暫しもたまらず、馬上からすべり落ちた。寄手はその弓勢に、全身の血を

全身の血を凍らせる  
ひどく驚いた  
さすまはにいふ



凍らせた。さはいへ、耻を知る源氏と源氏、かくても義朝方は一足も引かなかつた。引きかへ引きかへ戦ふうちに、どつと吹きまくる朝嵐につれて、忽ち西の方に火の手が卷上つた。「あゝ火が……」

爲朝は弓を投げすてて、悵然と空を仰いだ。金の星のやうな無数の火の子が、阿修羅のやうな彼を取巻いて、空一面に降りそぐのであつた。

### 一三 戸隠登山

萩原井泉水

翌朝顔を洗ふとて水に手を入れると、指が切れさうな清水だつた。木で作つた大きな昔風の手洗だらひで、宿の前に出て見る。そこら一面の露だ。麻畑でも、桑畑でも、叢でも、

悵然 くらみなげくさま  
阿修羅 阿修羅王のこ  
と力が強く  
帝釋と争つて  
正法を滅さう  
としたといふ  
悪魔

俳人 名は藤  
吉。明治十七  
年東京に生ま  
れた。光明三  
味。井泉水俳  
話。新俳句提  
唱等の著があ  
る。

Utagawa

(三) 戸隠山の西方  
約八里。海抜  
二九三三メー  
トル

藁屋でも、犬でも、馬でも……向うに戸隠に續く西山が見える。戸隠によく似たジッグザグな峰の連立した山で、ちやうどそこに朝日がさしかけたところだ。屋根が深い壁をなしてゐるので、光の當る表に緑が燃立ち、その裏の谷間が眞黒にくつきりと刻みこまれてゐる美しさ。そのすぐ左に遠く見える白馬嶽の積雪が、ほんのりと薄赤く染まつて行く美しさ。――登山の幸を約束するやうな、すばらしい好晴だ。――きのふ呼んだ案内者が、山國通有な無表情な顔を、少しにこたこさせながらやつて来て、外に立つてゐる私に、「お早うございます。」といふ。雪袴を穿いて、腰に木の鞘にはめた小刀をさして、何といふか知らぬ、もつこのやうな厚い蓆に紐を附けたものを背にしてゐる。これにけふの握飯や草鞋などをつけて、負うてくれる氣なのだらう。人の好きさうなおやぢだ。



Stick

そろり、そろりと出かけた。暫くは流に沿うた路にステッキを振りながら、散歩でもするやうなゆつたりとした氣持で、露がべつとりと深い。桔梗や野菊は露が重たくて、臉が開かれないといふ風をしてゐる。

ゆふべ月を見て立つてゐたあたりには、唐松がまばらに生えてゐる。この木の楚々とした高原的な感じは懐かしい。それから先へ行くと、景色が開けて、白樺があちこちに立つてゐる。をりから朝日が原の上を洪水のやうに漲り寄せて、その華やかな光線が、樺の艶やかな木肌にきらきらと反射する。鶯があちらで、またこちらで、好い機嫌に鳴いてゐる。

飯綱山がこんもりとして右手に迫つてゐる。そしてこれから登らうとする戸隠が、高く峻しい姿を以て、びつたりと行手に立現れて來た。ちよつと勇み立たれるやうな氣持になる。

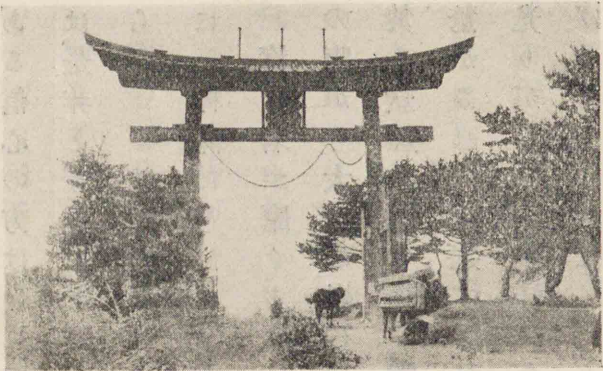
楚々

(一)長野縣上水内郡戸隠山の東南約三里、七海抜一、九一七メートル

(一)戸隠神社

けややか

(一)奥社おくしゃの入口から十數町、眞直に杉並木が続いてゐる所はすばらしい。この木立の下が坦々として參道になつてゐる。杜鵑がげざやかに鳴く、ほぞんかけたか。ほぞんかけたか。と。それから山鳩が「ぼうるん、ぼうるん」と。昔はここに十數棟の寺屋敷があつたものだ。と案内者がいふ。なるほど大きな礎が雑草の中に残つてゐる。雑草の一つに、露のやうな葉で、どの葉もどの葉も蝕んだやうな穴のあいてゐるのがあつた。何といふ草だと尋ねると、何といふのがほんたうか知らぬが、俗に、やぶれがさといふと案内者は教へた。



居鳥の一社神隱戸

奥社は山の麓にびつたり沿うた少し高みの所にある。規模は小



さいが、幽邃なこと第一である。信州の人はよく戸隠に詣でる。さうした講も多く出来てゐるさうだ。それは皆この奥社までくるのである。信心の方はそれで足りる。然し、戸隠の雄勝を探らうとするには、是非とも裏山を踏まねばならない。これから上には水がないから……。」案内者がいふので、ここの御手洗に落ちこむ清水を水筒に一杯満たした。

案内者が磨くまゝに、社務所の勝手口のやうな所にはいると、山の腹から大きな巖石が岩戸のやうになつて出つはつて、この内で焚く炊煙に燻されて、鐵のやうに眞黒に光つてゐるのに、ちよつと驚かされる。見廻すと、社務所の柱も、天井も、塗立ての漆のやうな黒光りがして、漆の汁が今にも滴りさうである。ここに帳面をぶら下げ、

此所ヲ通行サレル方ハカブリ物ヲ御取り下サイ 社務所

とある。戸隠には天狗様が澤山ゐて恐しいさうだから、命これ従はねばならぬと豫てから聞いてゐた。帽を脱いで、この黒光りした岩戸の下を潜つて出ると、その裏からすぐに急な上りになる。

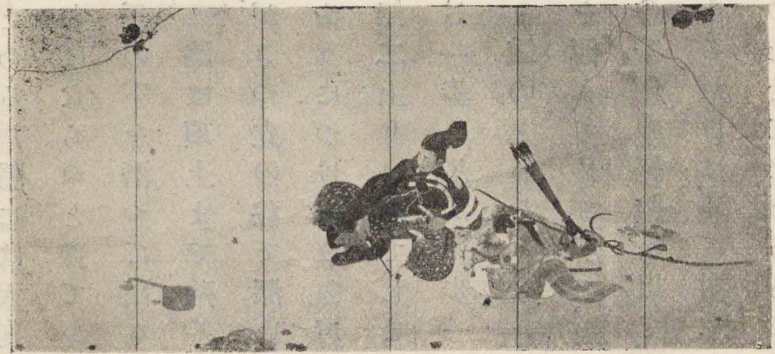
路は頂上まで殆ど一直線についてゐると見える。それはこの山がきつ立の谷で深い襜を作つてゐるので、路は谷から渡つて縫ふやうにつけることが出来ず、一つの尾根の背にすがりついて、遮二無二上りきつてしまふより、路のつけ方がないからである。それだけ一步一步が、一步一步だけ目に見えて眼界を廣く展開する。

蟻のとわたりといふ嶮岨があるとは聞いてゐたが、それは岩石を傳うて移る所で、幅二三尺に足らぬ岩の背が、右も左も文字通りの千仞の絶壁を以て、げそりと直角的に谷になつてゐるのである。そこだけは、邊に樹木も少い爲、足元の危さ、谷の深さが、一層はつきりとそこを通るものの目を脅す。これと似て劔の刃渡と稱する難

千仞



(一) 戸隠山の西南方。海拔二〇三五メートル。  
 (二) 戸隠山の南方。海拔一四二二メートル。  
 (三) 平維茂。平貞盛の養子。

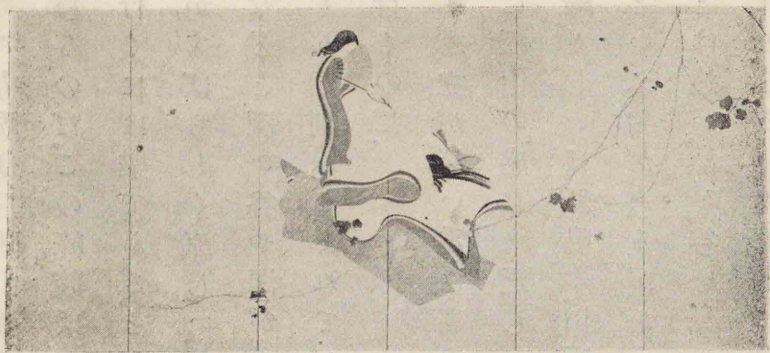


紅葉狩(小) (筆達榮山) の一

所がまだ一個所ある。霧の深い日や風の強い日などには、むづかしさうである。その試練が済むと、むづかに絶頂である。ここの展望臺を八方睨といふ。これも天狗様の聯想からついた名であらう。いかさま八方遮るものなき景觀である。まづ北に漫々たる日本海が水平に盛上つてゐる。光の受方のせい、か、光らずに薄黒くどんよりと憂鬱な感じをしてゐる。西の方には近く西嶽<sup>(一)</sup>と荒倉山<sup>(二)</sup>とが並んでゐる。荒倉山は戸隠傳説にある維茂<sup>(三)</sup>が鬼女を退治した所として、謠曲「紅葉狩」によつて名高いアルプスの連峰はここから

(一) 新潟縣中頸城郡。長野縣との境。海拔二四六メートル。  
 (二) 妙高山の南方。新潟縣との境。海拔二〇五三メートル。  
 (三) 戸隠山の西北方。約一里。

(四) 上水内郡。周湖。三里の淡水。よく避暑地として好適地である。



紅葉狩(小) (筆達榮山) の二

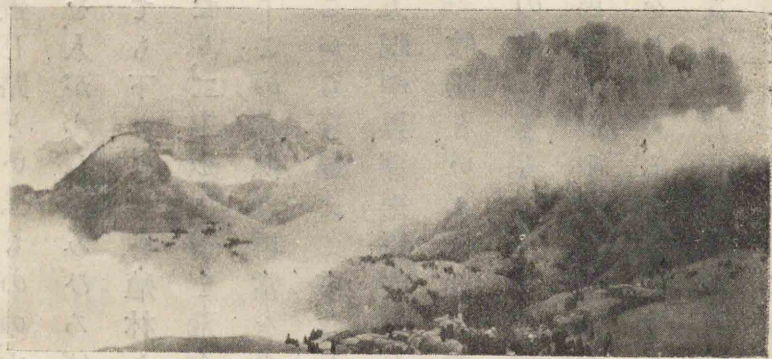
見て更にその結構の雄大に驚かれる中に、白馬の雄姿が愈々輝いてゐる。北東から東にかけて妙高<sup>(一)</sup>、黒姫<sup>(二)</sup>、高妻<sup>(三)</sup>、飯綱の群山が峙つてゐる。この高妻は戸隠の奥山とされてゐるもので、きのふ山上の小屋に泊らうと考へてゐた小屋といふのは、高妻の頂上にあるといふことだ。地上に低く銀色に圓く光つてゐるのは野尻湖<sup>(四)</sup>だ。それから南に寄つて遠くうねうねと白く光つてゐるのは千曲川だ。南には淺間山から上州、武州、甲州にかけての連峰、お、富士が見える。富士が……によつほりその紛れない頭をぬき出してゐる。



八方眺は戸隠山の西端である。そこから山の背を傳うて東端に移るのだ。この峰渡は上り下りが少い。ここらにも木立は深いので、行くには樂である。そして右に左に展ける眺が面白いし、吹通す風がすばらしく涼しい。龍の谷、岩戸の谷、大科の谷、白澤、塔の澤、燒の澤などと深い谷や澤が、天然の大きな斧の力を思はせるやうに、ぎつくりと刻みこまれてゐる。その縁邊に沿うて馬の背のやうな路を行くのだ。

木立が深い爲に高山の感じに乏しい。また展望が開けてゐる爲に深山の感じに乏しい。小鳥の数が非常に多い。そのうちでも鶯は騒々しいほど鳴く。川原ひわがよく囀る。一鳥啼かず山更に幽なり。といふ句があるが、かう鳥が賑やかに鳴くことも、深山といふ感じとは遠い。然し、谷を見ると、絶壁に沿うて高山植物がびつしり咲いたり、小さいお花畑になつてゐる所もある。そんな所に蝶がひらひ

(一)王安石、鍾山の詩句。



(筆岳敬井西) 山隠戸の映入

らと懸崖にすがりつくやうに飛んでゐる。天狗の話も聞かされた。この山に来て、天狗の不思議を嘲る話などをすると、忽ち天狗の怒に觸れる。今までそよとの風もなかつたのに、俄に木立が嵐のやうにざわめき立つてくることがあるさうな。また夜はをりをり、かんら、かんら、と大きな音で人の笑ふやうな聲がする。それを天狗の高笑といふが、とても人間業では出来ぬ高い聲ださうな。下山路は石がごろごろして、その間に水がじくじくと流れてゐて、歩きづらい。



蓋し路といふものの、山の雨水のはけ口として自然に出来たものを、人が少し踏みひろげたくらゐに過ぎないのだ。けれど、何といつても下りは早い。殖林したらしい若い木の緑の清々しい林があつたり、二三步に石を飛んで渡るくらゐな幅の川があつたりして――この水源は辨當を食べた清水なのだ――やがて牧場に出た。ここから今越えて来た戸隠の峰續きが、全體くつきりと仰がれる。八方睨や、黒澤や、釋迦澤なども、一々指摘される。相應に高いなと思ふ。牧場といふのは村で經營してゐるので、可なり広く、實に天成の牧場ともいふべき地勢を利用して、牛や馬を放牧してゐるのだ。馬の一群の遊んでゐるのが遠くに見える。馬が越えないやうに柵をしてある所を抜ける時には、また元の通り柵をして置いて過ぎる。たつた一軒番小屋がある。そこに寄つてお茶をふるまはれた。けさ中社の宿に置いて来た荷物は、番小屋まで別の使で届けて

(一) 上水内郡柏原村

置いてもらつたので、それを受取つて、ここで案内者に別れた。柏原まで四里といふ路は、廣い平坦な、それと共に平凡な路だ。二里行つて大橋の茶屋といふのがあるが、暑さうな家なので寄らずに、また一里ほど行つて、馬子たちと一緒に葦簾茶屋に休んだ。この茶屋に柏原發の汽車の時間表が貼つてある。それを見て、六時半の上り列車に間に合ふやうにと歩調を早めた。驛が向うに見える頃から、黒姫と妙高とが夕日を背にして、鮮かに大きく坐つてゐる姿が、實に美しく顧られたが、今にも向うに汽車の烟が見えさうな時間が切迫してゐるので、ひた急ぎに急いだ。そして私たちが停車場に飛込むのと、汽車が入つてくるのと全く一緒だつた。

一四 山 靈

(二) 上 田 敏

(三) アルプス山の絶頂……峨々たる峭壁のつらね……高山のたゞ

(一) 詩人、文學博士、東京の人、大正五年歿、年四十三、藝論集、文藝講話集、文藝卷等の著がある。(二) ヨーロッパの南西部にある雄大な山脈



Jungfrau.  
im Finstern-  
horst.

中。  
 山上に澄みて音なき淺緑の空あり。霜烈し、むごし。雪かたし、光あり。雪をさきて、氷の峰、風の頂、怒るが如く聳ゆ。  
 大山ふたつ、地平のこなたにしてふたりの巨人なり。  
 ユングフラウの峰、<sup>(一)</sup>フィンステラルホルン山。  
 ユングフラウは隣山に問ふ。もの珍しきことありや。われよりも廣く見給ふ君、雲の下に何かある。  
 この時、數千載は轉じぬ、たゞ一分なり。フィンステラルホルンとよもし答ふ。地の上に雲霧……暫し待ち給へ。  
 數千載再び過ぎぬ、たゞ一分のおもひ。  
 さて今はとユングフラウ迫る。  
 今ぞすべて明らかなる。天が下なべて同じ。水青く、森黒く、石疊み、灰色、その中に虫あり。ここかしこ惑ひ歩く。知り給ふらん、君をも我

をもえ汚さざる二足の者等よ。

人間か。

然り、人なり。

數千載また轉ず、これ一分。

さて今こそとユングフラウは問ひぬ。

雷音にしてフィンステラルホルンは答ふ。今虫の數少し。天が

下少し明るし。水は引きて、森もまばらと。數千載またゆきぬ、たゞ一分。

分。

何を見給ふとまたユングフラウの尋ねなり。

我等の近くは澄みまさりゆけど、谷間遙かに斑點残りて、何物か

動ける如しと答ふ。

數千載また轉ず、即ち一分の後、ユングフラウは問ふ。さて今は

今こそすべてよけれ。なべて清し、白し……いづこも、いづこも我



等の雪、果なき氷雪ぞ、なべては氷りぬ。今こそよけれ、静かなれ。  
さらばよしと、ユングフラウうなづく。されど我が友、雑談に時は  
移りぬ眠るべき時ぞ。

まことや、その時なり。  
かくて大山は眠りぬ。澄みたる蒼空も永遠寂寞の境をかけて眠  
りぬ。  
——上田敏全集——

一五 伊勢志摩の海

田山花袋

凄凉

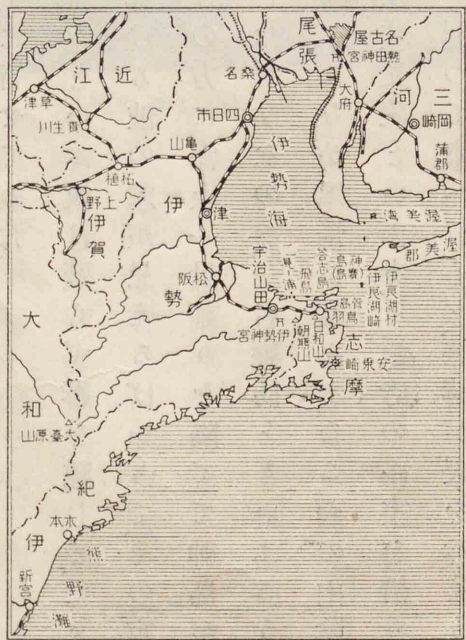
(一)小説家。名は  
録。綱。明。治。四  
年。群。馬。縣。に。生  
まれ。た。一。兵。舎  
教師。源。頼。朝  
の。著。が。あ。る。

南歐の風光、地中海の大觀を見馴れた西洋人でも、日本の海岸美  
には一驚を喫せずにはゐられないさうだ。その日本の沿海の美、そ  
の美の最も遺憾なく發揮されてある所は決して少くあるまいが、  
自分の見た中では、伊勢の海からかけて志摩、紀伊の沿岸に如く所  
はない。優美に傾かず、凄凉に過ぎず、さりとして甚だ平凡に陥らず、港

灣相接し、島嶼相連なり、斷江、荒磯、漁村、蟹戸、燈臺もあれば松原もあ  
る。海水が深く陸に入つて、恰も溪流のやうな入江をなすかと思へ  
ば、月光が閃々として千里  
の海上を照らし、斜に翫つ  
た一帆の片影の遠く雲外  
に消える光景など、殆ど應  
接に暇がないといつても  
よい。

伊勢志摩の海、如何に變  
化に富み、明暗に富み、空想

に富んでゐることだらう。自分は曾て三河國の最南端渥美郡の一  
角、伊良湖村の絶端なる古山といふ山の上に立つて、一眸の下に伊  
勢志摩の海を見わたしたことがあつた。夏だったが、日は一時間ほ





ど前に、遠く向うにうちわたされた伊勢朝熊連山の陰に落ちて、一時美しく西の空を彩つてゐた種々な形や種々な色の面白い夕べの雲も、いつ消えゆくともなく消えはてて、もう薄暗い夕暮の光が、どこともなく暗碧な波の上に寄せてゐた。

見わたす限り舟といふ舟、帆といふ帆は残らず影を隠して、大海のところどころに白く碎ける波の頭が見えるばかりで、その寂しさといつたらなかつた。左の方に、海上一里許りを隔てて神島が見える。ちやうど甕を倒にしたやうなので、一名甕島ともいふさうだが、この島は行つて見ると、なかなか風情に富んでゐる。西の山陰に五六十戸の漁村。そこには桂光院といふ寺。その寺の一室を借りた村役場。それからその島を廻つて東へ行くと、怒濤が天を吞まうとするやうな絶海に臨んで、絶大な洞窟の奇観。満潮毎にその中に吞吐する海水の響は、恰も巨人が天に向かつて叫ぶやうで、その壯

観はとても都人士の想像し得るところでない。神島の少し右方に當つて黒い黒い大島の影、それは志摩の答志島たかしだ。菅島、飛島、その他

無數な大島、小島、

潮 日は漸く暮れて、海の色は愈、

黒く、その上に浮かぶ島の影も

微かに、星のまたゝき、遠海のさ

さやき、遠山の姿、自分は深い深

い空想に耽つた。平和、人の世の

平和とは抑、何ぞや、自分はかう

叫んだ。平和を望む心、平和を欲



山 口 蓬 春 筆

する念、遂にこれ己の弱きを表白してゐるのではあるまいか。見よ、この自然を見よ、この大観を。海は四方から來て陸を吞まうとし、陸はこれを拒ぐべく全力をつくしてゐるではないか。島、岩、これ等は



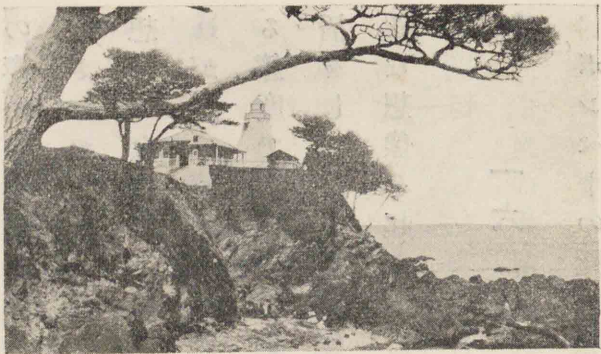
皆陸が布置して以て海の怒濤を拒がうとする前衛ではあるまいか。けれども、海の力は時の永久な力を借りて、次第に島を崩し、岩を碎き、岸を陥れて、次第に陸の運命を縮めつゝあるのではあるまいか。

「戦闘」と自分は叫んだ。實際この伊勢の海の大觀に接すると、誰でも戦闘といふ感を起さずにはゐられまい。島と陸と、波と山とが、いかに互に刃を交へてゐるやうに配置されて、伊勢の内海はまるで海水に攻落されたやう。その海門を守る諸島の影は、孤城落日の状態に陥りつつ、なほ陸の爲に節を守つて奮闘してゐるやうに思はれるのだ。

若し人が、自分の空想に耽つたやうに、その古山の一角に立つて、薄暮の影の四方に満ちわたるのも知らず、にゐたならば、千鳥の寂しげに鳴く聲が、歌のやうにその耳を掠めるので、覺えずその恍惚

孤城落日

から覺めるだらう。その時は、影の低いばらばら松の間を過ぎて、外



(一) 志摩郡安乗崎。

安乗の燈臺

志摩國安乗の廻轉燈の光である。

あゝ、この詩趣ある燈臺、自分は殆ど想像するにも堪へないのだ。



(一) 志摩半島。

絶海の畔、漁村を距ること數町、磯馴松が風に吹かれて、皆面白く斜  
によれてゐる半島<sup>(一)</sup>の絶端、懸崖千丈、暴風雨の荒れる夜などは、怒濤  
の響、松の響、海の鳴る響、風雨の吼える響、殆どその凄じい力に、吹飛  
ばされてしまひはせぬかと疑はれるばかりのその燈臺に、若い空  
想がちな青年でなければ、年老いて世の荒波に漂ひはてた老爺、そ  
れが靜かに、穩かに、世の中ではとても見ることの出來ない悠揚た  
る態度で、海に惱む船人の爲に、その夜毎の勤を怠らない寂しい生  
活をしてゐる。どんなに空想に乏しい人でも、これを見ては、さまざま  
まな想像を起さずにはゐられまい。

—花袋紀行集—

一六 イタリーの風景

(二) 柳澤健

(二) 詩人、外交官。明治二十二年、福島縣に生れた。果樹園、海、南歐遊記、印象派の畫家等の著がある。  
(三) Pompeii

(二) ポンペーの死市をうしろにした自分たちの自動車は、まつしぐらに街道を馳驅して行く。振返ると、濃い煙のやうな埃が車の走り

(一) Vesuvius  
イタリー、ナポリ灣東岸の活火山。

行くあとを朦々と立單めてゐる。火山灰なのだ。<sup>(一)</sup>ヴェスヴィアスの降らした灰がまだその儘になつてゐるのだ。新しいポンペーは、かうして火山灰の堆積した中に建てられてゐる小さな貧しい村だ。寺院の圓頂だけが、燦く日の下に悠やかに輝いてゐる唯一つのものであつた。

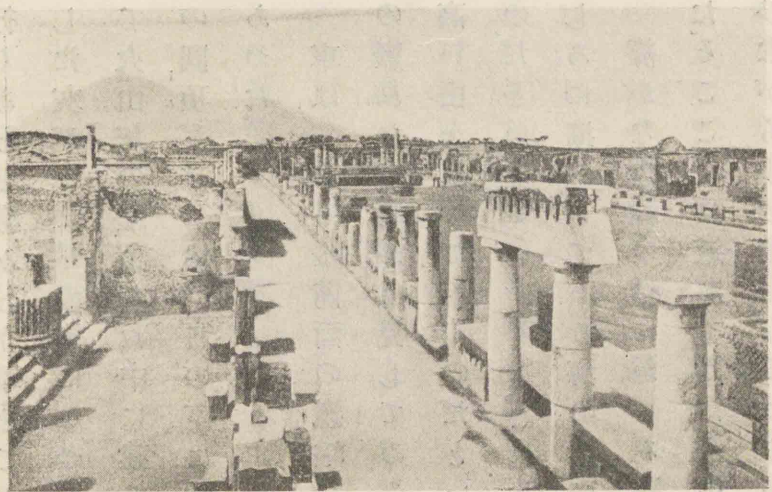
車は一步一步前面の巍峨たる山にと近づく。その頂に近く、赭色の廢れた古塔が隠見してゐる。その古塔のあるところ迄、車はこの高い山を登つて行くのだといふ。そしてつと山のうしろに出るのだといふ。<sup>(二)</sup>アマルフィー、これから行かうとしてゐる場所は、そのうしろに擴がつてゐる海の岸に當つてゐるわけなのだ。

靜かな山麓の村にかゝる。谿川が音を立てて、その中に流れてゐた。そこここに遊んでゐた子供などは、いづれもこつちを向いて笑ひながら手を動かしてゐる。中には花をもつて來て、車内に投込む

(一) Amalfi  
イタリー、サレルノ灣の北に臨む港町。



(Campagna) 中部イタリアでローマ府を  
かこんでゐる  
地方



子などもあつた。戸口に凭りかゝつた娘の一人も、子供と同じやうに手を動かしながら笑ひを贈つてゐる。  
もう山だ。相當いい道だとはいへども、幅の廣い自動車が通るとイ殆ど人が通れないまでになる。羊の群をひきつれた牧者などが立停古まつて、車の通り過ぎるのを待つ都てゐる。羊の群がこはこはと一方に寄りかたまつて顛へてゐるのは、氣の毒でもあり愛らしくもあつた。歩(一)一步カムパニアの平原が

(Napoli) ネーアプルスともいふ。イタリアの絶佳な風景の知られてゐる。



眼の下に見えるやうになる。今通つて來た麓の小村や、その白い道や、橋や、谿川やが小さく小さく見える。平坦な野はヴェスヴィアスの山麓から右手に屹立してゐる山脈の間を廣々と擴がつてゐる。その青い絨緞の上に點々とこぼれてゐるのは家だ、赭色の屋根をもつた家だ。  
やがていつしか自分たちとヴェスヴィアスの峻嶺とは相比肩するやうになる。その峻嶺の肩越しに、おぼろに碧く光つてゐるのは、あれはナポリの海だ。つた。



先ほど目じるしとなつてゐた古塔は、やがて車のすぐ右手に現れた。と同時に道は下りかけた。ヴェスヴィアスもカンパニアの野も、ナポリの海も一瞬のうちに隠れてしまつた。おゝ氣がつけばあの燦かしい太陽までが今は密雲の中に隠れてしまつた。風が肌に冷冷とまづはつて來た。もうどこを見ても山が重疊してゐた。その頂には雲霧がまた佗びしげに去來してゐるのだつた。

が、かうした山の中にも「人生」はあつた。路も見えないやうな山腹や、谿間やに、いくつかの家は横たはつてゐた。道傍に立つて、わざわざ帽子を脱ぎ、こちらにお辭儀をする百姓などもあつた。道に沿うて五六軒並んでゐる小村では、戸口にぼんやり立つてゐる無邪氣な子供もあつた。先ほど車内に投込まれた花束を解いて、その一本を投げてやると、ふと、びつくりした顔をして間もなく微笑をこちらに投げてくれるのも面白かつた。

(1) Citron.

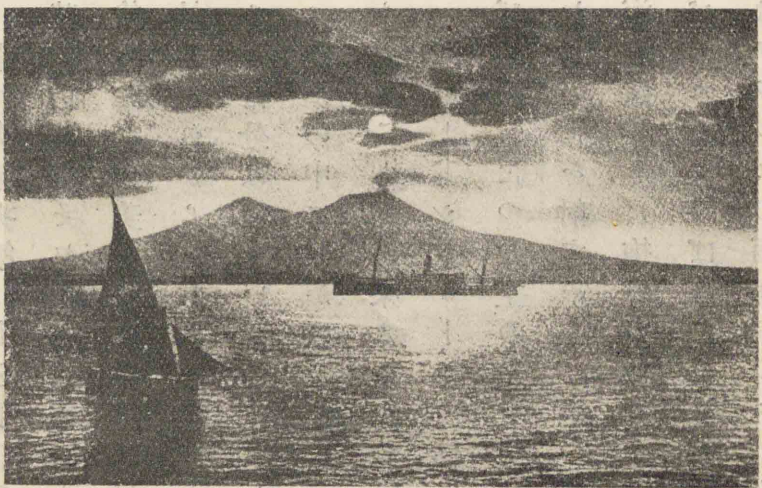
(2) Johann, wolf-  
gang von Gö-  
the. ドイツの  
文豪。西暦一  
七四九年—  
八三三年。  
(3) Wilhelm Mei-  
ster.  
(4) Mignon.

(5) Riviera. ニー  
スからリボル  
ノに至るジュ  
ノバ灣一帯の  
氣候溫和な地  
(6) Nice.  
(7) Cannes.  
フランス地中  
海岸の港

車は次第次第に山を下つて行く。風は次第次第に暖くなる。古い建物、古い塀、それに古い橋——古風な村が、水に寄りかゝつてゐる繪のやうに美しい姿が、思ひがけなく現れたりする。(1) シトロンの林がそれからそれへと色ばんだ黄金の實をにほはせて擴がつてゐる。自分は何といふわけなしにあのゲエテの(2) ウイルヘルム・マイステルの中に描かれてゐるミニヨンの幼い姿が、かうした村でも見ることが出来るやうな氣までするのであつた。

海が——シトロンの林にかこまれた山地は急にひらけた。再び晴れわたつた空の光を受けたその海の色の碧さ、眩ゆさは、自分たちの瞳を射すやうに迫つて來た。凹凸をなした曲浦が、その光の海を遠巻きに抱いてゐる。(3) ビイエラ・イタリアーナ(イタリアのリビエラ)と呼ばれてゐる言葉(4)を忽ち自分は思ひ出した。全くそれはフランスの南海岸の(5) ニースや(6) カーンヌやのあたりに似てゐる。





然し、それよりもこれはもつと明るくもつと碧かつた。海岸のマジヨリといふ町を過ぎると、岬一つ越したところにアマalfiの町がある。アマalfiは中世に於ては、大きな「海の町」として、かのヒザジエ海ノアとも並び稱せられた土地であつたといふ。然しその熾んだつた焰はもうすっかり消えてしまつた。随つて、今日のアマルフィは廢れた城砦の幾つかと、サンタ・アンドレア寺院とをその古代の思

Sancta Andrea

Genoa

Magliolo

Capri

Henrik Ibsen  
の劇作家、  
西暦一八  
〇六年  
Terrace

ひ出としてもつてゐるだけであるけれども、昔ながらの碧き海と、奇しき巖と、濫かき太陽とは今も變らぬ美しさをもて、數多い人々の心をひきつける土地となつてゐるのであつた。<sup>(一)</sup>カプチニの僧院をなほしてホテルリユンヌと名付けてゐる、海へと突出た岬の上に聳え立つ古風な旅館の食堂で、時遅れの晝餐をとることとした。この旅館はかのヘンリック、イブセンが「海の夫人」を書いた所として、その人のイタリア語で認めた感謝状といふのが食堂に掲げてある。食事を済まして、しばらくテラスで燦かしい海景をほし、にしてから、また車中の人となつた。道は曲折を極めた海岸線に沿うて走つてゐる。晴れやかな陽と海とは、絶えずあたりに笑みこぼれ輝きわたつて、些かな暗影も憂愁もこの世の中にはありさうでもなかつた。わけて海の上は童話の中にある海のやうに、碧々と綺麗な色に燦いてゐた。小さな白い



(Italy) 地中海の最大島。イタリア半島の西南。

(Olive) (Orange)

ものが、ぴちぴちとその碧色の中で光つて見えるのが、魚といふより眞白な人魚でもあるやうに見られるのだつた。水際に當つてシシリーの鳥影でも見えはせぬかと眼を遣つたけれども、柔かい靄がほのぼのと立單めてゐるだけであつた。が、却つてそのあたりから麗はしい唄が、微風につれて響いてくるやうな氣さへせられるのであつた。  
道は海岸から離れた。オリーブの林、シトロロンの林、オランジエの林が、それからそれへと緩やかな丘を飾つて、明るい日射の中を、車中までも匂うてゐた。

——南歐紀行——

(一) 第四十一代。

(二) 歌人、古今集の撰者。天慶九年(一六〇六年)歿。

(三) 武將また歌人。治承四年(一一三四年)平家を滅さんとして敗死した。年七十七。

# 一七 清水

持統天皇

春すぎて夏きたるらし白たへの

ころもほしたり天の香具山

紀貫之

なつの夜はふすかとすれば杜鵑

鳴く一聲にあくるしのゝめ

ひらねありてはあきふくからに  
あきのしをるまはむへや  
まかせをあらしてふらむ

傳紀貫之筆蹟

庭の面はまだかわかぬに夕立の

源頼政



そらさりげなくすめる月かな

賀茂真淵

大びえや小びえの雲のめぐりきて

ゆふだちすなり粟津野の原

夏

渡原を東北朝子  
御影共支六月迎空真淵

蹟筆淵真茂賀

渡原朝子能榮  
登朝由子能榮  
御影共支六月  
月空真淵  
鎌倉時代の歌  
人嘉禎三年  
(二八九七年)  
致年八十

かぜそよぐならの小川の夕暮は

みそぎぞ夏のしるしなりける

西行法師

道のべの清水ながるゝ柳かげ

しばしとてこそ立ちとまりつれ

一八 蘭學者の苦心

加藤弘之

(一)文學博士。法  
學博士。男爵。  
兵庫縣の人。  
大正五年歿。  
年八十一。  
權新説。天則  
百話。加藤弘  
之講義集等多  
くの著がある。  
災累

(二)信濃松代の藩  
士。名は啓。開  
國説を主張し  
て京都で暗殺  
された。時二  
元治元年(二  
五十四年)年

余が蘭學を學びしは、もはや米艦渡來の後にて、既に時勢も進み  
たれば、世の嫌厭も少くして、昔の蘭學者の如く身に災累を被る憂  
はなかりしかども、今日の如く完全なる學校も、教師も、書物もなく、  
その困難、不便固より今日青年者の想像し能はざる所なり。  
余が家は代々甲州流の兵學師範家なりしが、父もその業を繼ぎ  
ゐたれども、到底今日の用に立たざるを覺り、余をして西洋流の兵  
學を學ばしめんと、考を起し、佐久間象山の門に入れて、西洋の兵  
學砲術を修めしめき。然るに、僅かに一年半にして、不幸にも象山は  
幕府の罪を得て、蟄居を命ぜられぬ。然れども、余はその後益、蘭學を  
修むる必要を感じ、また知人の勸告あり、十九歳の時、芝なる大木忠  
益の門に入れり。當時同門の人々には、薩藩人多く、小藩にては大垣



藩の人多かりき。これ等の藩々にては、藩士に蘭學を奨励すること盛にして、書籍學資等は、十分藩主より支給せられし故その學資の過分なりしが爲、却つてこれを遊蕩の資に費して、遂に墮落したる者も少からざりき。余は但馬出石の小藩の臣なりしが、藩中にも蘭學の必要を唱道せし者なきにあらざれども、多數の人々はこれを好まざりしかば、藩主もたゞこれを許したれども、學資を給し、書籍を與ふる等のことは、固よりなかりき。當時蘭書は甚だ乏くして、巨費を有する者と雖も、容易に得られざりしなり。就中、兵學書、砲術書は最も貴重にして、スチールチースと稱する砲術書の如きは、五六百頁の書なりしが、一部の價實に二百兩なりき。以てその一般を推知すべし。當時蘭書は長崎通辯の手を経ざれば購求すること能はず。而して一度かれ等の手に渡れば、非常の高價となり、みすみす巨利を貪られしなり。その後江戸に長崎屋と稱する書肆を開きて、專

ら蘭書を販賣するに至り、大いに購求の便利を感じたれども、なほ原價より四五倍の高價なりき。故に書生は購求するに窮して、皆原書を謄寫せしを以て、大いに寫本の流行せしことあり。

蘭學の書肆は、長崎屋の外、二三軒ありたれども、需要者多き爲、忽ち缺乏を告げ、諸藩にても容易に購求する能はざるを以て、諸侯は書生をして必要の蘭書を謄寫せしめたり。故に貧生は皆諸侯の需に應じ、許多の寫本料を得て、遂にこれを遊蕩の資に供するもの多かりき。かくの如き有様なれば、直接原書を以て攻究することは、固より容易の業にあらず。甚だしきは、字書をも謄寫するに至れり。普通の書物は、些かの誤寫ありとも忍ぶべけれど、字書に誤寫ある時は、非常なる誤謬を來すものなり。然るに、寫本は専ら貧生のこととすると、ころなるを以て、徒に迅速を尊び、誤謬を訂さざりし爲、杜撰の字書も極めて多かりき。

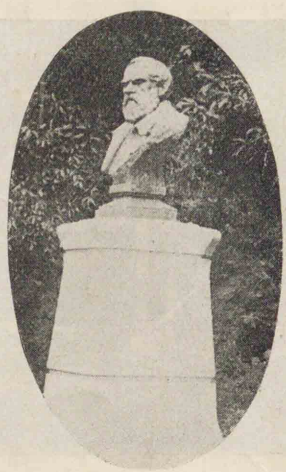
杜撰



(一) 蘭醫。美濃國池田の人。嘉永元年(一八二〇年)歿。年五十四。  
 (二) 佐賀藩の醫官。肥前國の人。明治四年歿。年七十二。  
 (三) 蘭英學者。周防國の人。明治十一年歿。年五十七。  
 (四) 蘭醫。江戸の人。安政六年(一八五九年)歿。年四十三。  
 (五) 蘭醫。江戸の義弟。成卿の義弟。明治二十二年歿。年七十二。  
 (六) 航海學者。總國の人。明治初年歿。  
 (七) 美作津山侯の侍醫。文久三年(一八六三年)歿。年六十六。  
 (八) 蘭醫。攝津三田の人。明治四年歿。

當時、蘭書を教授する所にして、學校の體裁を具へたるものなく、教授の方法は、恰も漢學者が漢籍を教ふる如く、先生まづ講釋をなして後、生徒に會讀せしむるのみ。  
 當時、江戸にて主なる蘭學先生は、坪井信道<sup>(一)</sup>、伊東玄朴<sup>(二)</sup>、手塚律藏<sup>(三)</sup>、杉田成卿<sup>(四)</sup>、杉田玄端<sup>(五)</sup>、木村軍太郎等にして、これ等の人は、皆蘭學塾を開きて教授せり。然しながら何れの塾も、今日の如く秩序井然たる規則もなく、修學の時間も一定せざるに依り、懶惰生は自由に怠り、勉強家は熱心に勉強せしを以て、勉強家は學業發達すれども懶惰生は十數年彼方此方に轉塾して、遂に學業を卒らざる者尠からざりしなり。  
 余が二十二歳の時、即ち今より三十八九年前に、幕府にて蕃書調所を設け、杉田成卿<sup>(四)</sup>、箕作阮甫<sup>(六)</sup>、川本幸民、杉田玄端等を以て、主なる教員とせり。これを我が國に於ける蘭學の學校の濫觴とす。然れども、

入學者は、最初は幕臣のみなりしが、二三年を経て、諸藩士も願に依りて入學を許可せり。幕府既に蘭學の必要を感じて、學校をさへ設立せしかば、諸藩もまた漸くこれを奨勵するに傾き、随つて書籍の輸入も増加し、寫本の時代は去つて、漸次に書籍に就き攻究する時代に進みたり。



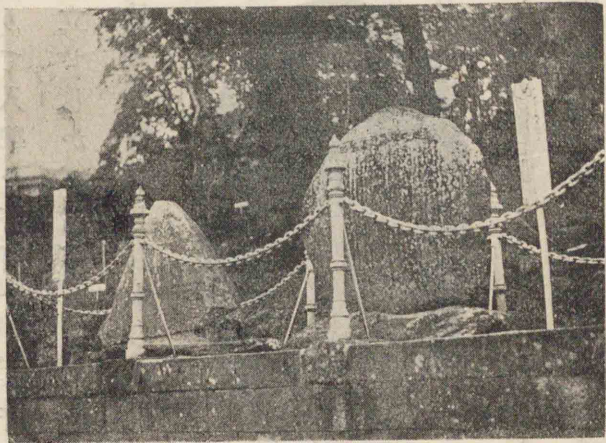
かくて四五年を経て、蕃書調所の蕃の字穩ならずと評するものあるに至り、これを開成所と改稱せり。これ余が二十七歳の時なり。余が蘭學

を始めしより、ここに至るまで、蘭學者は専ら兵學と砲術とをのみ研究せしが、ここに至つて初めて政治、法律等の學科をも攻究するものあるに至れり。その後、余は蕃書調所の教員となりて、書籍にも不便を感じず、専ら蘭學を攻究したれども、たゞ書籍を讀むのみに



Philip Franz  
von Siebold.  
ドイツの博物  
學者、醫學者。  
(西曆一七九  
六年)一八六  
六年)

該博



碑念記トルボ一シ

して、了解せざる廉尠からず。しかもこれを質すの師友なく、往々困  
苦を極めたりしが、たまたま蘭人<sup>(一)</sup>シーボルト再び來朝せり。氏は植  
物學者にして兼ねて醫學を教授し  
たれども、今日より見れば、兩者とも  
決して該博なる人物にはあらざり  
しならん。我が國の有志者にして、西  
洋のことを聞かんとする者には教  
授せんとのことを、幕府へ申し出で  
たり。當時、余は既に蕃書調所の教員  
なりしを以て、同所より選ばれて、氏  
を旅宿に訪ひ、種々質問を試みたり。  
植物學、醫學の外、知る所なければども、  
我が國人は、西洋人とあれば、何事にも十分の學識あるものと妄信

猖獗

せしなり。現に余の如きも、國法學、航海術のことまで質問せしが、満  
足なる答を得る筈なけれども、西洋人の言ふこととて、一同これを  
謹聽せしは、今より見れば實に笑止の限ならずや。然れども從來書  
籍のみに依りて研究せしものが、直接に西洋人に接して質問する  
に至りたるは、斯學の爲に、一段の進歩と言はざるを得ず。  
それより、漸次蘭學は開けたれども、一方に、攘夷論大いに沸騰し、  
殊にかの長州の戰爭の前なりしかば、攘夷家の蘭學者を嫌惡する  
こと甚だしく、外國交易を不可とする論もまた甚だ猖獗なりしを  
以て、余は「交易問答」といふ書を著して、これを世に公にせり。これ維  
新の前々年、即ち余が三十歳の時なり。當時は蘭學のみならず、既に  
英學を學ぶ者も尠からず。攘夷家と雖も、敢て洋學を學ぶを非とす  
るにあらざれども、然し我が國人が蘭學、英學を學ぶは、畢竟かれの  
事情を知る器械とするに過ぎず。かれと交際し、かれの文明を輸入



し我が國を開明に赴かしめ、かれと交易して、我が國を富まさざるべからずといふ余の論は、極めて攘夷家の嫌厭するところなるを以て、その妄を辨ぜんが爲なりき。これ頗る時勢に背反せる議論なりしかども、幕府は固より攘夷説にあらざるを以て、本書を出版したれども、敢て咎を受けざりしが、攘夷家は大いにこれを非難せり。學校なく、書籍師友に乏しく、且つは世人より嫌厭せられし維新前洋學者の苦みは、實にかくの如きものなりき。

### 一九 國文學と國民生活

文學といふものは、その性質からいへば、詩人、作家が永遠なる或ものを見出して、これを表現するところに本意があり、眞の價値がある。千年前の歌で、今日の我々が讀んでも深い感に打たれ、貴い慰藉を感じるやうな所謂名歌の、いつまでも亡びない所以は、この

把持

永遠なるものを擲んで、これをよく表してゐるからである。自然の歌であれば、自然の精髓とか生命とかいふ永遠の相を歌ひ出したものであれば、時は如何に移つても、それが不變な人間性なり人情なりを確かに把持して、これを表したものであれば、何時の時代の人にも理解をもたせ、同情感激を起させて、亡びないものである。人間の生活の外面の相は、時代を追うて色々に變化し、言語文法もいろいろに變遷するから、古代文學は讀みにくく、解し易からずなつてゆくのは已むを得ないけれども、その變化しゆく生活の外面を剥ぎ去り、むづかしく難解になつた言語をよく讀取つて見ると、その中に包まれたものは、決して後世の人に通じないやうな、また一時代的で直ぐ亡びてしまふやうなものでなく、今日の我々の靈にもよく響き、我々の生活に共鳴を起さしめるのである。不滅の傑作であれば、必ずさうあるのである。



我々の思想や生活は、時代と共に新しく移つてゆくものである。また變化してゆかねばならぬものである。然し全然新しくなるものと思つたら、また大きな誤であらう。我々は傳統の影響を受けることが甚だ多い。自分自らは新人と稱し、新しい生活をなして誇つてゐる人でも、存外多く古い傳統を受けてゐるものである。たゞさう氣づかずにある人が多いのである。傳統の中には、後世から批判すれば、よいものもあれば、つまらぬものもある。所謂玉石混淆の有様である。それを知らずにつまらぬ傳統の拘束を受けてゐる人もある。またよい傳統を受けてゐる人でも、自覺的でない者は、自然これを伸ばしてゆく力が強くない。

普通教育の上で國語教育、國史教育を重んずる理由は外にもあるが、その主なるものは、自國の國民性、國民精神に自覺をもたせることにある。歐米の各國、各民族から、彼の長を採つて我の短を補ふ

玉石混淆

といふのは、明治維新以來の我が政治の大方針の一であるが、それは決して生活の外面のことに限られてはならない。採長補短は國民性、國民精神の上までも及ばねばならぬ。一國民の國民性なり、國民精神なりをその古來のもの儘に、石の如く固つたもの、絶對のものとして考へてはならぬ。それには變遷もあり得べきものであり、また意識的に改善も企つべきものである。たゞ然しながら、中にはその國民に取つて變化、改善を許さない絶對的根本的なものがあり、それがその國民の特徴、長所となつてゐるものであつて、それを涵養してゆくことが最も大切であることを忘れてはならぬ。今日世界の強國を成してゐる國民を見るに、これ等の國民の偉大をなし來つた根柢は、その國民のもつてゐる特殊な性格の極少數の長所を伸長し發展させて來たものであると信ぜられる。それが衰へる時、その國民は衰へ、それを多く失ふ時、その國は滅亡すると思



はれる。言ひかへれば、採長補短の道に由つて國民性を養育改善し、國民精神を改良してゆくことは肝要であるが、古來傳へ來つて、今日特異なる國家を成し國民團結の基となり、國民文化を作り上げる上に與つて最も必要であつた國民性の長所を益磨き立てて、その光を益發揮させることは、決して閑却すべからざることである。この國民性の自覺といふ上に最も役立つものは國文學ではなからうか。國文學を國史と相提携させ相助けしめて、これを國民の間に普及してゆくことに由つて、この國民性の自覺が成されると思ふ。何となれば、國文學といふものは、國民自身が描いた自家の影像である。自己の傳記である。そしてそれは偽らざる内面生活の告白である。偽らざる告白なるが故に、道德の標準から見れば、必ずしも善とされるものに限らず、惡とされるものまでも、その儘に表されることが多い。そこに動もすると、文學が社會から嫌はれる理由

もあるけれども、またそれによつて國民生活、國民精神の真相を見つむるを得る便の頗る大であることを考へねばならぬ。その眞の相を見つむるといふことが、我々が日本國民としての自覺を得る第一歩であると思ふ。

かう考へてくると、我々が現代に生まれ合はせて、遠い千幾百年來の國文學を知らうとし、これを研究するといふことは、たゞ過去の爲に過去を知り、過去の爲に過去を研究せんとする道樂でもなく、遊戯でもなく、物好きでもなく、今日の我々の必要の爲であり、我自身の生活の爲である。我々が國民性、國民精神の理解と自覺とによつて、國民としての生活の一步一步を確乎としたものにし、充實したものにし、力強いものにしたい爲といふことが出来る。我々が日本國民として、拜外の夢に迷うて何の爲に生きてゐるかわからぬやうな、あやふやな弱い生活から脱して、強い國民的自信をも



つ生活を得たいといふ當然の要求の爲といふことが出来る。

——日本文學聯講に據る——

### 二〇 弘淨寺の松

野口米次郎<sup>(一)</sup>

(一) 詩人評論家。明治八年愛知縣に生まれた。英詩集の外、表象抒情詩、野口米次郎アツクレット等の著がある。

(二) 愛知縣海東郡津島町。

(三) 畫僧。名は等楊。備中赤濱の人。永正三年(一五六六)歿。八十七歳。

淋瀝

睥睨

私の少年時代の追憶は弘淨寺の松の木で始る。……松は雪舟<sup>(三)</sup>が墨色淋漓と描いた雄松のやうに、天へ昇らうとして地上との離別を惜しむ植物界の大蛇だ。弘淨寺は私の郷里にある淨土宗の寺である。詳しくいふと、郷里の家の二階に大きな丸窓があつて、外をのぞくと右手に見える寺である。然し、私の追憶に問題となるのは、この寺の屋根ではない。この寺の墓場の隅に小さく埋つてゐる私の妹ではない。この寺の奥にある稻荷の社でもない。また庭の池へ水を飲みに出る狐でもない。幾百年たつても雄渾の氣魄を失はずに周圍を睥睨する松の木が、天氣の良い日には、はうき目綺麗に掃

最初の頁を塞ぐ

除された本堂前の廣場へ黒い影を投げるので、この寺が私の追憶の最初の頁を塞ぐのである。この寺が、寧ろこの大きな松の木が、少年時代に於ける私の遊び友だちであつた。

私の少年時代の追憶には梅樹がない。櫻花がない。霧のやうに煙る晩春の柳がない。また瀟洒な立姿の水仙がない。私は少年の時この百年緑を變へない松から、横擴がりに下へ向かつて稜々たる氣骨の幹や枝を無遠慮に伸ばす松から、一言で蔽ふと、大地の生氣が一本の樹木と化したと思はれる松の木から、男性美の影



弘淨寺の松



龜裂

婉麗

(一)畫僧。名は忠因。姫路の人。文政十一年(一八二八年)歿。年六十八。  
(二)狩野探幽。有名な畫家。延寶二年(一六二三年)歿。年七十三。

響を受けたことを喜ぶものである。私はこの弘淨寺の松の木を遊び友だちとしたといつたが、実際には私はその木を恐れたのである。一種の恐怖心を以てその木に接したのである。松には雲雨を得て天に昇る大蛇のやうな龜裂の入つた甲らの皮膚がある。松には觸れると手を刺す針のやうな葉がある。が、松には人に婉麗の感をそゝる何物もない。弘淨寺の松の木に關する私の追憶は、群青金泥の酒井抱一の松ではなくて、毅然として百難に堪へる雄姿が紙上で風雨を呼ぶ雪舟探幽の松である。私に語らねばならない追憶がある。

煮えくり返るやうに熱い夏の日が續く。田地田畑に稻や麥が唇を潤ほし根を濕すに足りる一滴の水もない。地面は割始め、樹木は萎れかける。日中は蟬が雨か霰のやうに雨乞の歌を地上に降らす。夜分になると、家の前を、雨乞の百姓が鐘や太鼓をたゝいて、牛頭天

王の御社へと急ぐ。もの凄いほど眞暗な御社には、雨乞の百姓を迎へる爲に提燈が點り、かがり火が焚いてある。御社の神主の家の座敷に、昔から靈驗あらたかといはれてゐる探幽の瀑布の畫が出されてから、もう十日以上になる。……沛然たる雨を呼ぶはずの「探幽の瀑布」は、魔力を失つたのであらう。ところが十五日の満願の朝早くから、無言の祈禱を歌つてゐる巨人がある。……他ではない、弘淨寺の松の木である。間もなく天は曇り始め、力強い風が吹出す。……否、それは雨を祈る松の木が吐出す龍のうなり聲であらう。松の木の祈禱は答へられた。恐しく大粒の雨が落ち始め、半時間もたたない中に、天を空しうして降る豪雨となつた。人間の歡喜以上に喜ぶのは弘淨寺の松の木である。誰か私の外に、篠突く雨を全身に浴びつゝ、傲然として立つこの松の偉觀壯觀を見たものがあらう。この松の木の態度は、百倍の勇氣を振ひ起して三軍を叱咤する暴將軍

篠突く雨  
傲然



のそれであつた。

私には弘淨寺の松を單に樹木とは思へなかつた。……雨を拂ふ春風に乗つて、一つの白い蝶々がこの松にとまつた時、私はその温顔に平和の微笑があることを知つた。群禽を眼下に睥睨して擴げた大鵬の羽が、急に嬌態を作つて顧眄する美人の扇面と變つたと思つた。私は靨黷たる霞の春の日に、この松が奏でる午後の催眠歌を聞いた。そして、この松が雪の朝にほつてりと大きな綿帽子を被り、その綿帽子が太陽の光線を受けて、金剛石のやうな光を放つた時の光景はどうだ。私の家は傳統的に熱烈な佛教信者であつて、私は朝念佛を聞いて起き、夜念佛を聞いて床に就いた。毎朝早く鐘の聲が弘淨寺から響いた時、私は私が尊敬するあの松の木の音であるやうに感ぜざるを得なかつた。夕景になつて木魚の音が聞えて來た時、私は私の畏敬するあの松の木の聲であるやうに感ぜざる

傳統的

嬌態  
顧眄する  
靨黷  
催眠歌



三更

妖魔

を得なかつた。私は夕景の木魚を聞くと、家の二階の丸窓をほつたり縮めて、この松を見ることを恐れた。……夜陰の空に立つその姿は、實に恐しいものであつた。私は夜になると天狗の寢床になるであらうとさへ想像した。また私は母から死んだ妹の杓子のやうな人魂がこの松の間へ落ちたといふことも聞いた。

弘淨寺の松の木に關して私の忘れることの出來ない追憶がもう一つある。私の追憶は九尺以上もあつたと思はれる彗星に關係してゐる。世界が終局に近づく印として彗星が現れるのだと聞いた時、どんなに私の小さい胸は戦いたであらう。夜も三更に近い時、母は眠つてゐる私をゆり起して二階へ連出し、例の丸窓をあけて、弘淨寺の松の木を見よと語つた。私は恐る恐る青臭い呼氣を吐く老龍の松を見た。……老龍の角とも思はれるあたりに、妖魔の彗星が引懸つて居つた。私は、寧ろ私の心眼は、彗星の光に照らされて、松



葉の針がざらざら光つて居つたやうに感じた。私はどうしてこのもの凄しい深夜の光景を忘れることが出来よう……それを思ふと私は今も身ぶるひをして、その夜の恐怖に撃たれるのである。

二一 十訓抄と著聞集

一 都良香

(一)平安時代の儒者。初名言道文章博士。元慶三年(一〇五三年)歿。年三十六。

都良香、竹生島に参りけるに、眺望心に澄みて、三千世界眼前盡まといふ句を作りて、その末を案じ得ざりければ、靈天託宣を下して、十二因縁心裏空そと、一句加へ給ひけり。

(二)平安京の正南門。  
(三)菅原道真。  
自讃

同じ人羅城門を過ぐとて、氣霧風梳か新柳髮かと詠じたりければ、樓上に聲ありて、氷消浪洗こ舊苔ことつけたりけり。良香菅丞相の御前にて、この詩を自讃し申しければ、下の句は鬼の詞なり。とぞ仰せられける。

——十訓抄——

(一)歌僧。後鳥羽天皇頃の人。

(二)藤原氏。

感應

(三)三島神社。愛媛縣大三島に在る。

二 能因法師

能因入道、伊豫守實綱に伴なひて、かの國に下りたりけるに、夏の初、日久しく照りて、民の歎あさからざるに、神は和歌に感應し給ふものなり、試に詠みて三島に奉るべき由を、國司頻りに勧めければ、

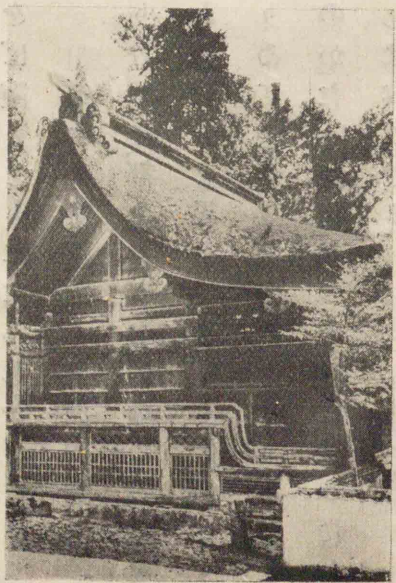
天の川苗代水に

せき下せ天くだり

ます神ならば神

と詠みて、みてぐらに書きて

神官かんづかして申し上げさせれば、炎旱の天俄に曇りわたりて、大きな雨降りて、枯れたる稻葉押並べて緑に復りにけり。忽ちに天災を和ぐるなこと、唐の貞觀の帝の蝗いんせを吞めりける故事にも劣らざりけ



社神島三大

(四)太宗のこと。貞觀は太宗の年號。

みてぐら



念なし

(一)名は覺猷。戲  
畫の名手。二  
延六年(一  
八〇年)寂、八  
八十八年保



飛 倉 の 卷 (鳥羽僧正筆)

この入道は至れるすきものにてありければ、

都をば霞とともにたちしかど

あきかぜぞふく白河の關

と詠めりけるを、都にありながらこの歌を出さんこと念なしと思ひて、人にも知らせず久しく籠りゐて、色を黒く日にあたりなして後、陸奥國のかたへ修行のついでに詠みたりとぞ披露しはべりける。

—古今著聞集—

三 鳥羽僧正

(一)鳥羽僧正は近き世にはならびなき繪かきなり。法勝寺金堂の扉の繪かきたる人なり。い

(一)鳥羽法皇  
入興

比興

つほどのことにか、供米不法のことありける時、辻風の吹きたるに米の俵を多く吹揚げたるが、塵灰の如くに空に揚るを、大童子、法師ばら走り寄りて、取りとづめんとしたるをさまさまにおもしろう筆を揮ひて書かれたりけるを、誰かしたりけん、その繪を院御覽じて、御入興ありけり。その心を僧正にお尋ねありければ、餘りに供米不法に候ひて、まことのものは入り候はで、糟糠のみ入りて軽く候ふ故に、辻風に吹揚げられ候ふを、さりとはとて、小法師ばらが取りとづめんとし候ふがをかしう候ふを書きて候。と申されければ、比興のことなりとて、それより供米のさた厳しくなりて、不法のことなかりけり。

—古今著聞集—

二二 舊藩の明君

徳川時代三百藩は、各その土地人民を領して、一々別國の觀を呈



堵に安んず

分に安んず

實踐躬行  
齊家  
治國平天下

してゐたが、いづれも學者を聘し、賢者を擧げ、學問を勧め、産業を起し、出来るだけの善政を布いて、封内の人民をして、その堵に安んぜしめるやうに苦心した。鎖國の二百六十餘年間は、かくして太平無事な世であつた。上下の階級がやかましく、職業世襲の制度で、技能材幹あるものの新進の途は十分に開けて居らなかつたが、四民皆その分に安んじ、その業を樂しんで何等の不平もなく、安穩な生活を營んで居つた。およそ世界の歴史で、これほど安樂な時世はなかつたらうとさへ、或外國の史家はいつた。

大學、中庸、論語、孟子の四書は、忠孝の道を訓へる儒教の經典で、武士はこれを學んで、實踐躬行の標準とした。いづれも齊家を本として、治國平天下の大道を教へたもので、個人の修徳から社會の改善に進まうとするのである。孟子の書には、殊に人君たる道、人民を治める道を説いた文章が多い。君主は天に代つて人を治めるので、君

進講

封す

徳のないものは君主たる資格がないといふ支那思想が、その根本になつてゐる。各藩の藩主は皆それを自分のこととして、徳を修め、治に勵むことに工夫した。各藩の儒者は皆この旨を以て主君に進講したのである。間、暗君で民を虐げたものもないではないが、概しては各藩に賢明な主君があつて、民衆の福利を圖つたのである。各藩の藩祖には明君と稱へられた人が多く、各その遺訓を子孫に傳へて居り、歴代の主君はまた皆藩祖の遺訓を守つて、ひたすらその家門を辱めまいと考へて居つた。今各藩主の顯著な治績について、その二三を記さう。

徳川義直は家康の第九子で、尾張名古屋の藩祖である。慶長十二年始めて尾張に封ぜられ、十四年名古屋に城を築いてこれに居り、慶安三年五十一歳で歿した人である。この頃は戦亂が僅かに息んだばかり、人々は武藝を修めるのみで、諸藩共に學政に心を傾ける



聖堂  
釋奠

人は少かつた。義直はこの時に於て儒教を尊奉し、聖堂を建てて釋奠の祭を行ひ、經籍も多く集めて、盛んに藩中の學問を奨励した。文教に於て實に諸藩に率先したのであつた。尾張の敬公といふのはこの人で、明治三十三年正二位の贈位があつた。

紀州和歌山の藩祖頼宣は義直の次の弟で、家康の第十子である。大阪の冬の陣に、十三歳の初陣をした人で、智略もすぐれて居つたから、殊に家康に鍾愛された。夏の陣に軍功のないのを悲しんで、十四歳は再び來らず」といつたのは、名高い話である。或時藩吏の某々等が、諸所の土地を開拓して、新田を作ること願つた頼宣はこれを聞いて、我が領分の中には、數多の名所舊蹟があつて、累代の和歌集にも載つてゐる。たゞ實利をのみ圖つて、天下後世のもの笑にならな」といつたので、そのことはやめになつた。

頼宣の同母弟頼房が水戸の藩祖で、その第三子が有名な光圀で

鍾愛

修史

陞叙

儉素  
（一）字は了介、中江藤樹の門人、京都の人、二三年五十四年、三十七年、七十三



徳川光圀

ある。忠孝の志も厚く、仁慈の徳にも富んで居つて、種々な善政を施したが、就中後代までもその偉勳を留めたのは、學者を集めて大日本史の編纂に着手したことである。それが爲に藩祿の半分を割いてあてたのである。國體論、尊王論の根ざしはここに生じたので、光圀の修史事業が、遠く明治維新の原因をなしてゐるのである。明治二年從一位の贈位があつたが、同三十三年には更に正一位に陞叙せられた。

池田光政は輝政の孫で、初め因幡、伯耆を領したが、後備前の岡山三十二萬石の主となつた。少年の頃の夜食は茶漬に焼味噌のみであつたといへば、その儉素のほども知られる。後熊澤蕃山を用ひて庶政を改善した。その語に、人に下り、目の前のことをも人に尋ね相談して善を取るところ、儉約の第一な



人言を容る

り。衣服家作等は儉約の枝葉たるべきものなり。といったのを見れば、如何にその人言を容れるのに工夫したかがわかる。或時封内の農甚助といふものが、親孝行の廉で褒賞を得た。それを羨んで、甚助の隣のもものがその真似をしたところ、光政は同じくこれにも褒賞



池田光政

を與へた。或役人、彼は似せものでございます。といふと、光政、似せでもよい。孝行を勵むがよい。といったさうである。加賀百萬石の前田家の第五代の主君を綱紀つなぢといつた。三歳で父の後を繼いで、八十二歳で死ぬまで、七十九年間在職したのも珍しいことである。藩政を改革し、學問を奨励した事蹟は、一々擧げるに違がない。その領土加賀、越中、能登の三個國の獄屋が、全く空虚であつたといふのでも、その政治の行届いた有様が知られよう。徳川光圀が、嗚呼

徳憑

忠臣楠子之墓といふ碑を湊川に建てたのも、この綱紀の徳憑に基づいたのだといふ。

上杉鷹山、名は治憲、米澤の城主である。學問を好み、學者を禮遇し、時々國中を巡視して、孝行を表彰することを怠らなかつた。農業を



上杉鷹山

奨める爲、みづから泥田の中に立つて鋤を執り、家老以下をしてこれに倣はしめたこともある。儉約を第一とし、種産業を興すことを令したので、藩中の風儀も全く改つた。米澤織などが今

日の産物となつてゐるのも、全く鷹山が勤勉の遺徳である。

熊本藩の賢君は細川重賢である。よく役人を拔擢して適材を適所に用ひたので、學問も興り、士風も振ひ、藩政も面目を一新した。天明年間の大饑饉の時のことであつた。勘定方の役人が重賢に向か

(一)天明五年(二四四五年)歿、年六十八。  
(二)光格天皇の御代(二四四一年)一

風儀



大節に臨みて死を致す

つて、今年は収入の減少が夥しいから、諸士の祿高を減らして入用に立てたらば」と建議した。重賢これを聞いて、大節に臨みて死を致すのは武士ではないか。武士の俸祿を減らしては、事に臨んで義氣の緩むこともあらう。減らすことは相成らぬ」と承知しなかつた。また米價が騰貴して、隣國では餓死者が頻りに出來たほどであつたが、重賢は國中に令して、米價の小賣値段を定めさせ、若し市中の米が皆無になつたら、藏の米を出して補ふといふことに定めたので、領内の米價は直ちに下落した。されば、その後參勤交代で東上する途中、豊後鶴崎まで三十里が間は、國中の人民が皆路端に跪いて感泣したといふ。

かういふやうな明君の事蹟は、數限りもなく多い。徳川時代の昌平無事も、全く偶然ではなかつたのである。

參勤交代

(一)大分縣大分郡の町

自修文

將たらんものの心得

(一) 坪野南陽

(一)前東京高等商業學校長。名は平太郎。東京の人。大正十四年、六十七歳、訃年。録の著がある。

閑散の役儀ひまな役目

引く側を呼ぶよせて會ふこと

をこの沙汰はかけたしう

昔、東照公が駿府に大御所と稱せられて、隠居せられたる頃、氣の利きたる青年が近侍を勤めけるが、この者將來有爲の士と思し召され、貴様も追々年をとること故、最早近侍などいふ閑散の役儀をやめて、大老の下に參じ政務の見習したらん方然るべし」とありければ、この青年仰せに従ひ大老の下にて二三年勉強して、久方振りにて大御所の御機嫌伺ひに駿府に罷り出でたるところ、家康公この者を引きて、大老の下にて多少の政務を行ひたれば、その遣方について意見もあらん、腹藏なく申し出でよ」と仰せられぬ。何がさて大老の執務振につきて多少の意見あらんも、御前に出でてかれこれと是非するは長上を蔑視するをこの沙汰故、おいそれと答ふる能はず、さりとて頻りに促がされ給ふに、今は黙することも叶はず、止むを得ず恐る恐る申し出づるやう

將たらんものの心得(自修文)



下僚  
下役人

高見  
すぐれた意見

澁滞  
事務などのし  
ぶりとどこ  
ほること

「拙者仰せに従ひ大老の下に政務を見習ふことここに數年、その執務の様を拜見するに、大老は下僚が書類を提出するに當り、これを一閱して、若し意に適せざるものあれば、必ず今一應熟考し、呉れよとのみいうて、その書類を却下するを例とす。その傍に在りてこれを見るに、大老の意中、既に成案ありて、かくせば可なりといふ高見あるもの如し。果して然らば某にして大老ならんには、直ちにその旨下命し、すぐ様これを訂正せばこと足るのみならず、事務も速に運ぶべきに、大老の策ここに出でず、必ずや一應推考を促がして却下す。これ事務澁滞の恐ありて、随つてことを遅延するの恐あり。如かず、某の意見に従はんには」と。

東照公聞き終つて曰く「汝既に意見あり、何ぞこれを大老に告げざる、速に歸任してこの旨大老に注告せよ」と、青年これを承りて、然かも頗る難色あり、されど嚴命なれば、今更いかんともすべからず、歸りて具さに大老に事情を語り、その意見のほどを申し

出でて教を乞ひけり。

大老莞爾として笑うて曰く「子が言一理なきにあらず、されど若し子の説の如く行はんか、部下その責任を感じず、一も大老の仰せ、二も大老の仰せといひ、萬一間違を生ずるとも大老の仰せなりとて、些かもその責に任せず、遂に政務に忠實を缺くに至らん。而して大老はひとり煩勞忙殺されて大局を達觀するの餘裕なきに至る。これ余の胸中成案あるに關らず、これを藏して告げず、下僚をして更に一段の推考をなさしむる所以なり。かゝる如くせんか、下僚は研究に研究を重ねて大いに當案を鍊るが爲、萬違算なきものとなるべし。萬一にもその結果間違を生ぜんか、下僚はこれを以て己の過失となし、八方善後の策を講じ、累を大老及び他に及ぼさざらんことを顧慮し、ここに事の無事平穩に解決するを見る、これもまた妙ならずや。且つ一見すれば、余の遣口にては事務澁滞の恐あるものの如きも、日々難件のみ生じ、珍し

煩勞忙殺  
いらくな苦  
勞で忙しいこ  
と

大局

物事の一般の  
有様

達觀  
ひろく全般に  
わたつて、觀  
察すること

累

かかりあひ



快刀亂麻を斷つ切味のよいすもつれた麻を切る意。仕事をとりまばよく極めてはやくこと。一瀉千里の勢。物事のすらすらと、とどろきほりなくはこんでゆく勢。

き事件のみあるものにあらず、大抵は大同小異の常務に過ぎず、故に一旦下僚の腹に合點のゆきたる以上は、いづれも例によつて例の如く、快刀亂麻を斷つ如く、一瀉千里の勢を以てすらすらと取扱ひゆくことを得べし。たゞ最初事に不慣の際に少々手間取るのみ。故に一々大老みづから手を執り筆を下して、命令訂正せんよりも、却つて事務の速に運ぶを以て、かゝる執務の法を取れり。と。

青年逐一承りていかにも尤に感じ、己の到らざるを悔い、趨つてこれを大御所に復命しなければ、家康公からからと打笑ひ給ひて、汝大いに學ぶところありしぞ本意なれ、大將たらんものこの心得こそ大切なれ。といひしとぞ。

二三 テニスの試合

尾崎喜八

(一) 詩人。明治二十五年東京市に生まれた。高層雲の下等の著があり、その他の翻譯ものがある。

(二) 慶應義塾大學。本詩は大正十二年十月行はれた同大學と東京高等師範學校との試合を歌つたもの。

(三) Tennis Court.

(五) Line.

(一) 大學の運動場で、  
 (二) テニスの試合をやつてゐる。  
 (三) コートのまはりは見物で一ぱい。  
 その長方形に密集した人垣の中で、  
 球が縦横にぼんぼん飛ぶ。  
 四人の選手が綾にみだれて、  
 堅く平かなコートの上を、  
 飛んでくる球にしたがつて前進し、後退し、  
 右に駆け、左に走り、  
 (四) 白いラインの内側の世界に、



はげしい熱氣の火花を飛ばす。  
 夕暮に近い空氣のさわやかさ。  
 太陽はうしろの森の頂に見える尖塔の上に、  
 めづらしく朗かな一日の、  
 親みある、また莊嚴な顔をして、  
 そのあたりの空間に金をまきちらしてゐる。  
 むかふの、東の空の淡桃色の雲、  
 またその下のはるかなはなだ色、  
 見わたすかぎり天も地も、  
 ひろびろした秋の静けさ美しさに、  
 水のやうに満たされてゐる。

まなざし

〔Serve〕

試合は刻々に熱してくる。両軍の選手の表情には、次第に決然としたものが加はつてくる。見物の注意は、飛びちがふ球の方向と、それに應ずる選手の稲妻のやうな動作の上に熱を帯びて集中する。サーブの手堅い打ちこみ。兩脚を開いてあらゆる難球を受止めようと身がまへる。前衛の決意と確信とのまなざし。打てば直ちに突進し、またはすばやく後退する飛鳥のやうなその運動。



白熱

颯爽

白熱

Ball.

球の性質を咄嗟に見て取るその俊敏な頭腦と眼と、  
 腰をひねつて横に拂ひ  
 飛びあがつて叩きこみ、  
 また片足を引き、兩脚を山形にふんばつて、  
 飛來する球をすくひ打ちするその颯爽たる姿勢。  
 實にそのあらゆる瞬間が白熱であり、  
 火鏡に火鏡した注意が、  
 修練の妙味と相俟つて、  
 看るものを驚歎せしめる伎倆をあらはす。  
 しかも當の選手は、  
 眼中たゞ一個の輝く球があるのみだ。  
 むしろ球の速度、それに與へられた迴轉の方向、  
 そのバウンドの方向の意識があるのみだ。

擽猛

Racket.

Violin.  
Staccato.

彼等自身球となり、ラケットとなり、  
 またラインとなつて、ちよつとの間隙もない。  
 その緊張しきつた體軀と神經の共同動作の美しき。  
 彼等四人の打ちこみ打ちかへす氣魄の猛烈さ。  
 そして輕快な球、擽猛な球。  
 笑つてゐるやうな球、怒つたやうに見える球。  
 またばらばらに碎けて飛散るかと思はれるラケットの  
 激烈な打撃。  
 またバイオリンの頓音のやうなその微妙な一あて。  
 一切の技術と頭腦と運動とがそこに現出するものは、  
 悉く一個の白熱した力である。  
 この氣魄を讚美する。  
 この白熱を讚美する。



これは単に遊戯でありながら、ここに捲きおこされたものはや遊戯ではない。眞劔そのものである。あゝ眞劔を讚美する。男子の眞劔を讚美する。勝負の如何ではない。問題は眞劔であることだ。人間のあらゆる生活に於て、藝術のあらゆる製作に於て、この眞劔さの現れる時、それは人を動かす力の美となり一つの勇となつて、内迫せずには濟まないと思ふ。

—空と樹木—

## 二四 日蓮上人

高山林次郎

この世の中で眞に偉大な事業といふのは、何も戦争に勝つたり、國を取つたりすることのみではない。少年の心には、とかく頼朝(トモ)や太閤のやうに、天下を取つたり、外國を征伐したりするのが、眞に英雄の事業の如くに思はれ、文藝や宗教の上の成功などは、さほどに尊ぶに足らぬことのやうに思はれるであらうが、これは大いなる誤である。敵を征服し城を屠(ころ)ることも難事ではあるが、人の精神を征服し、千百年の後世までもその勢力を有することは、人間の事業としては更に大きく、また更に尊むべきことではあるまいか。アレキサンダー大帝の遺業も、ローマ帝國の覇權も、その時々(トキトキ)の榮落に過ぎずして、今日に於ては何の跡形もないが、アリストートル(アリ)の學術や、キリストの教は、今日もなほ昔の如く、人の心を支配し感化し

(一) 思想評論家。文學博士。山形縣人。明治三十五年(一九〇二年)入道。著述は、袖の記、況わが後、録その著は、今、牛全集六卷に收められてゐる。

(二) Alexander the Great、マケドニアの有名な王。覇權。

(三) Aristotle、有名なギリシヤの哲學者。(西曆前三八四年—三二二年)

(四) Jesus Christ



(一)共に春秋の世の列國の一

快哉を叫ぶ

(二) Thomas Carlyle  
イギリスの文  
學者、歴史家。  
(西曆一七九  
五年—一八八  
一年)  
(三) William Shakespeare  
イギリスの劇  
作家、世界的  
文豪。(西曆一  
五六四年—一  
六一六年)  
情操

てゐる。春秋戰國の王覇の争も、支那の歴史に空しい文字を留めたばかりであるが、その當時に陳、蔡の野に飢ゑた孔子の教は、今もなほ東洋文明の根據となつてゐる。世に所謂英雄豪傑の事業は、壯快は壯快であるが、畢竟一時の野心家の野心を満足せしめる外に、多く後世に影響を與へるものではない。これを喩へるならば、ちやうど仕掛花火の、一時人目を眩まして、覺えず快哉を叫ばれるが、間もなく消去つて、もとの暗黒に立ちかへるやうなものだ。これを文藝や宗教の勢力の、深大で且つ永久なのに比べれば、事業の價值いづれが大であるか、自ら明らかであらうと思ふ。されば英國の哲人、カールは、イギリスが一人のシェークスピアを有することは、印度帝國を有するよりも尊いといつた。また人物の上から見ても、眞に大なる人物とは、その思想が高尙で品性尊く、且つ意力情操の絶大純潔な人をいふのである。その所

東家西家  
時勢の寵兒

(一)千葉縣安房郡  
天津町の北  
山上に清澄寺  
がある。

謂英雄豪傑と呼ばれる人の中には、その表面の仕事こそ人並以上に大きい、その品性のこれに伴なつて高潔なのは極めて乏しい。つまり彼等の多くは、境遇の幸であつたが爲に、おのれ眞にこれに當るべき才器品性がなくして、偶然に大事を成遂げたのである。例へば、高山の上に吹上げられた種子がそこに生長して、亭々として天際に聳えるやうなものである。若し禪一貫の赤裸にして突出したならば、東家西家の權兵衛、八兵衛同様の人間でないものが幾人あるであらうか。一言すれば、彼等の多くは、所謂時勢の寵兒であつたからである。

日蓮上人はその人物に於ても、その事業に於ても、眞に偉大と稱せらるべき人であつた。まづその事蹟から考へて見ても、安房の一漁師の子に生まれ、幼より出家して清澄山に上り、後、叡山に學び、十二年の遊學の後、當時



罵詈

大覇府

(一)日蓮の四個の格言。念佛無間、禪天覺真、言七國、律國賊

(二)神奈川県鎌倉郡川口村龍口寺の地かといふ



清澄山(田山)義雄(筆)

に行はれた佛教諸宗門の、いづれも教祖なる釋迦の眞意に違へるものなることを悟り、その故山に歸つて始めて法華の新宗門を開いたが、聞くもの皆狂として取合はず、却つて在來の宗門を罵詈したのを怒つて、彼を殺さうとしたものすらあつた。日蓮は遁れて鎌倉に至り、淨土や禪宗の全盛を極めつゝ、あるこの大覇府の大道に立つて、念佛者は無間地獄に墮つべし、禪は天魔の業ぞ、と大呼したので、執權北條氏の怒に觸れて、一度は伊豆に流され、二度は佐渡に流され、その間、暴民の爲に庵室を焼かれたり、龍口(二)に引かれて首斬られようとしたり、

刀杖瓦石の災難

生死の間に出入す

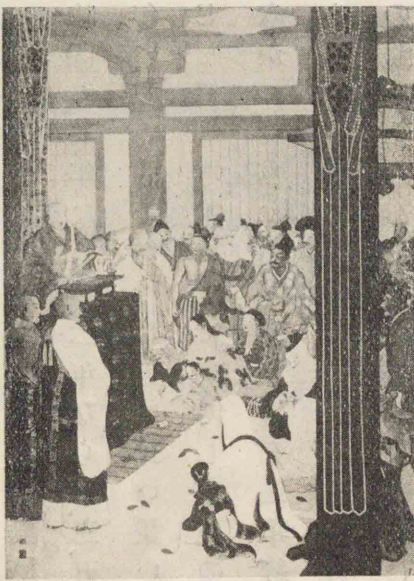
呼號  
(一)淨土宗の開祖源空のこと。  
建曆二年(一八七二年)寂年七十。  
(二)眞宗の開祖で本願寺の開基弘長二年(一九二二年)寂年九十。  
朝家權門

敵人に要撃されて命を落さうとしたり、その他、刀杖瓦石の災難その數を知らず、前後およそ二十二年の間、席煖アタタるに違なく、生疵の身に絶える間は殆どなかつたとのことである。  
日蓮の受けた迫害は、實に慘酷極つたものであつた。そしてその時間も一年ならず、二年ならず、三、五年乃至十年ならず、實に二十二年の長い間であつた。彼は長い長い二十二年の間、絶えず自己の信じた眞理を飽くまで宣傳し、生死の間に出入して、泰然として動かなかつた。常に「この臭き軀を法華經に捧ぐるは、砂を黄金に代へ、糞を米に換ふるなり」といひ、たとひ日本國の位を以て誘ふとも、父母の頸を斬らんと脅すとも、我は決してこの眞理をば棄てじ。その外の大難は風の前の塵なるべし」と宣言して、天下何恐るゝところなく、憚るところなく、聲の根の枯れない限り、筆の毛の續く限り、正々堂々と天下に呼號した。法然(一)や親鸞(二)のやうに、朝家權門の知己があ



介然孤立  
法鼓

るではなく、天上天下介然孤立の身を以て、滿天下の僧侶を敵として、折伏セツボクの法鼓を鳴らし、時の執權たる北條氏を逆賊と呼ぼはり、僅かの小島の主と卑しんだその態度の雄々しさ、男らしさは、實に我が國の歴史に類例のないことであつた。



(筆一卓橋高) 祖開の宗妙

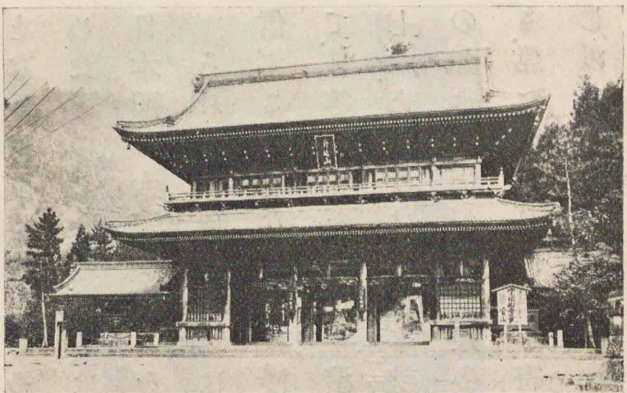
古人の語に、一義を執つて十年を踰こゆるものは必ず眞面目なり。といふことがある。日蓮は二十二年の長い長い月日の間、常に生死の間に入しながら、その眞理と信奉せる法華經を説いた。これほどの眞面目がまたと世にあるであらうか。されば天も人も次第にこの至誠の聲に靡ないて、その教は漸く都鄙とに擴がり、淨土、禪宗の僧侶どもも

痛言  
辛辣激越

(一)身延山。甲府市の西南九里、高さ一四八メートル

おひおひと改宗して、念佛の代りに唱題の響がだんだんと高くなつた。北條より足利の時代になつてからは、この宗門の勢は益々盛大となり、戰國時代にあつては、天下の寺院の中で、法華その半ばを占めたとのこと。今日では眞宗の全盛に壓倒されたが、それでもなほ日本國の大宗門たるを失はぬ。これ皆日蓮の遺業の餘澤である。それで日蓮の人物はどうであるかといふと、決して世人の多く信ずるやうな強情我慢一方の人ではない。七大寺の寺塔を燒拂やひて、彼等の頸を由比ヶ濱に斬らずば、日本國必ず亡ぶべし。など痛言したあたりは、實に辛辣激越シツラクキツキョウの極みではあるが、その裏面に溫潤玉ニホクの如き愛情が、春の泉のやうに溢れて居つた。夫婦の愛情に對しても、常に深厚な同情を寄せ、孝順の情に至つては、實に後人を感動せしめるに足る美蹟を遺した。即ち六十近い老境に至りながら、なほ父母を懷慕するの情に堪へず、身延(一)の山に引籠つてからも、毎日五





十餘町もある險山を攀登つて、遙かに生國房州の空を拜んだといふことは、實に孝行の鑑といふべきではないか。これが一月、二月のことではない、雨の日も、雪の日も、九年の長い間、一日も身缺かさなかつたといふに至つては、眞に延驚歎の外はないではないか。かういふ慈山悲愛情の話が、上人の生涯には外にも甚門が多い。世人が折伏の側の上人のみを見て、單に強情我慢の一狂僧と思ふのは、全く上人の人物を知らぬことを自白するに等しい。これを要するに、上人は知識に於ては、當時のいかなる碩學にも匹敵し得べき深大な素養を有し、またその威力に於ては、生死を顧ずしてその信念所志を貫徹する

碩學

俠骨

(一) 歌人。建人二年(一八五三)歿。年五十一。  
 (二) 京都のこと。當時都は遷されて攝津の福原にあつた。  
 (三) 平清盛。  
 (四) 攝津にあつた名所。武庫郡魚崎から深江津の濱をいつたらしい。  
 (五) 今の御影附近の松をいふ。  
 (六) 武庫郡布引山にある。  
 (七) 在原業平。右近衛中將。元慶四年(一〇〇〇)歿。五十一。  
 (八) 一はるる夜の星か河邊の螢か。我が住む方のあまのたぐ火か。  
 (九) 兵庫縣川邊郡猪名川の河口。

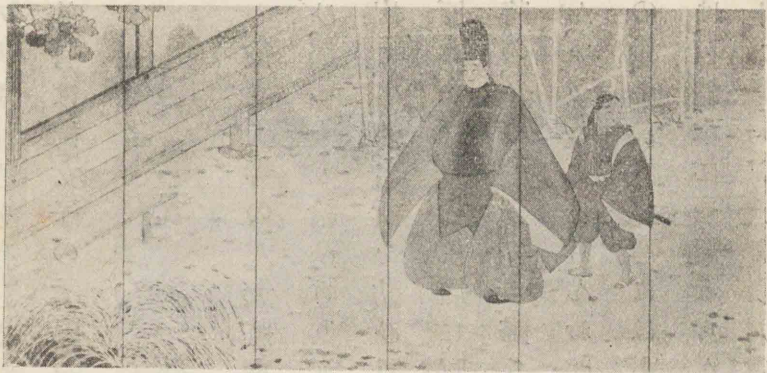
の大勇猛心を有し、またその感情に於ては、溫潤閑雅、所謂大丈夫の俠骨は婦女子の柔腸を妨げざる底の人情をもつたのである。

二五 舊都の月

(一) 後徳大寺の左大將實定は、舊都の月をこひわびて、入道に暇を乞ひ、都へ上り給ひけり。元より心すき給へる人にて、憂世の旅の思ひ出に、名所名所を訪ひ見てぞ上られける。千代に變らぬ翠は雀の松原、みかげの松、雲居に曝す布引は、我が朝第二の瀧とかや、業平の中将の、かの瀧見ての歸るさに、星か河邊の螢かと、浦路遙かに眺めけん、いづこなるらんおぼつかなるな、の湊の曙に、霧たちこむる昆陽の松。かならず春にはあらねども、山本霞む水無瀬川、男山に澄む月は、石清水にや宿るらん。秋の山の紅葉の色、稻葉をわたる風の音、御身に浸みてぞ思しける。

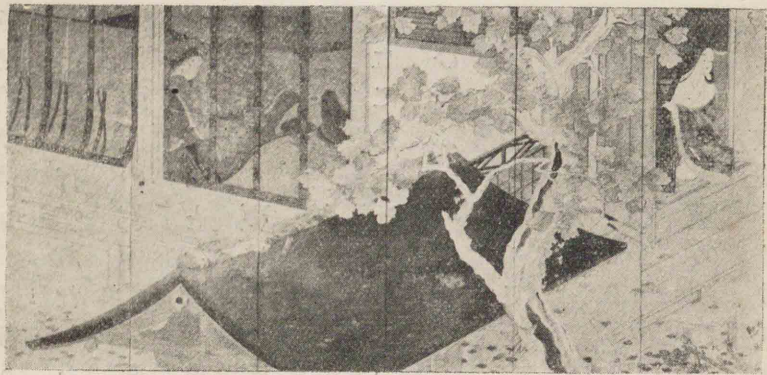


(一) 同郡稻野の舊名。今大字に昆陽といふのがある。  
 (二) 「見わたせば山も霞む水無瀬川に思ひけんとなく増鏡後鳥羽上皇」  
 (三) 大阪府三島郡島本村。山崎驛の南を流れる小川。蓬が柚鳥の臥所  
 (一) 近衛天皇の皇后



一のそ (筆陽南乾) 月の都 舊

さても都に入り給ひ、彼方此方を見給へば、空しき跡のみ多くして、たまたま残る門の内、行交ふ人もなければ、淺茅が原蓬が柚と荒れはてて、鳥の臥所となりにけり。八月半ばのことなれば、まだ宵ながら出づる月、主なき宿に獨り住み、をり知り顔に鳴く雁の聲さへつらくぞ聞し召す。大將はいとど哀に堪へずして、大宮の御所に参り、何がし小侍従といふ女房して、かくと申させ給ひければ、宮斜ならず御悦ありて、此方へ。と仰せけり。大將南庭をまはりて、彼方此方を見給ふにつけても、昔は百敷の大宮人にかしづかれて、明



二のそ (筆陽南乾) 月の都 舊

かし暮し給ひしに、今は幽かなる御所の御有様、軒に蔦茂り、庭に千草生ひかはす。こと問ふ人もなき宿に、萩吹く風も騒がしく、昔をこふる涙とや、露ぞ袂を濡しける。時しあればと思しくて、蟲の怨もたえだえに、草のとざしも枯れにけり。大將哀に心の澄みければ、庭上に立ちながら古き詩を詠じ、それより御前に参り給ひけり。八月十八日のことなり。宮は居待の月を待ちわびて、御簾半ば捲上げて、御琵琶をあそばしてわたらせ給ひけるが、山立出づる月影を、なほや遅しと思しけん、御琵琶をさしおかせ給ひつゝ、御心を澄ま

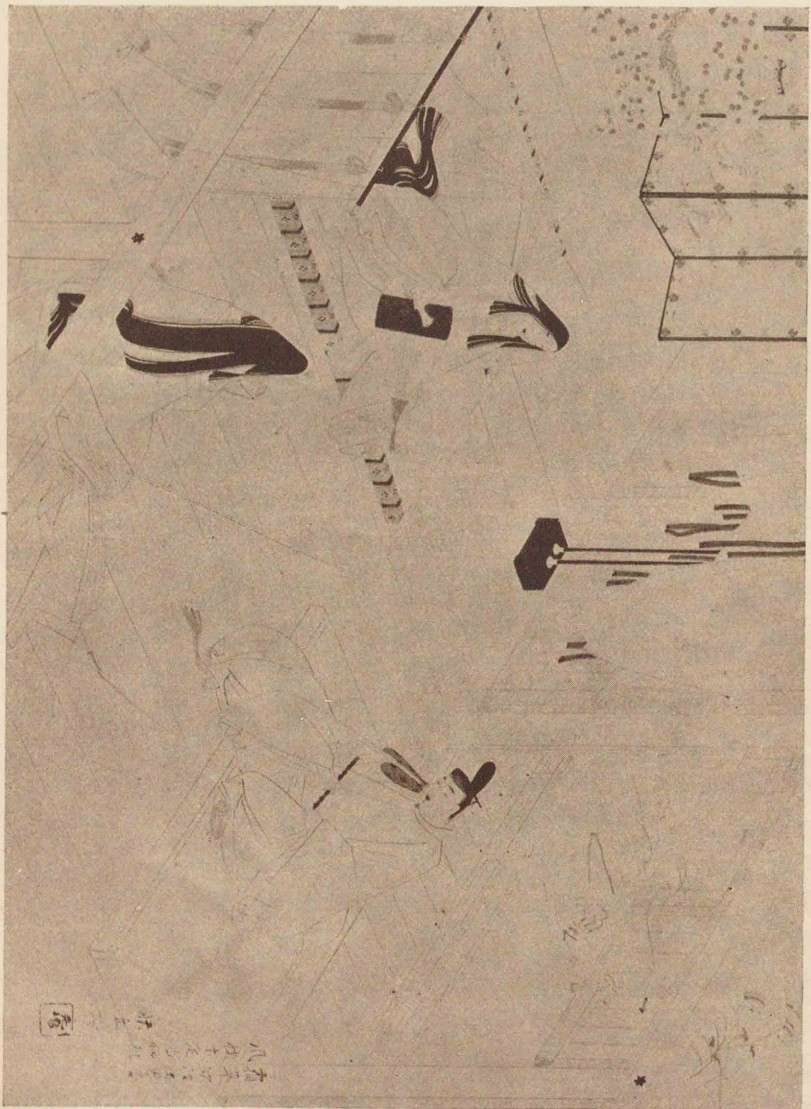


あたりを拂ふ

させ給ひけり。大將參り給ひければ、大宮は撥にて、それへ。と仰せけり。その御有様あたりを拂ひて見え給ふ。互に昔今の御物語あり。大將は福原の都の住憂きこと語り申して泣かれければ、宮は平の京の荒行くことを仰せ出して、共に御涙に咽せばせ給ひけり。かくて夜もいたく更けければ、后宮は御琵琶をかき寄せさせ給ひて、秋風樂を弾かせ給ふ。侍従は琴を弾きけり。大將は腰より笛を取出し、遙かにこれを吹き給ふ。その後故郷の荒行く悲しさを、今様に作りて歌ひ給ふ。

古きみやこを來て見れば、  
 淺茅が原とぞ成りにける。  
 月のひかりはくまなくて、  
 あき風のみぞ身にはしむ。

と三遍歌ひ給ひければ、宮を初めまゐらせて、御所中に候ひ給ひけ



筆丘映岡松

月の都舊



る女房たちをりから哀に覺えて、皆袂をぞ絞りける。

源平盛衰記

### 二六 三つの眺

煌々

群陰皆影を伏す  
有象無象

煌々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月休息の夜を照らす。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として仰いで見ることも出来ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一度出れば群陰皆影を伏して、大小の有象無象は悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である。慈愛の光である。炎熱を伴はない。清涼の光である。皎潔無垢、崇美と稱ふべき優しい光である。休息、安靜の夜には最もふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰藉を感じる。詩的情緒は油然として湧く。晝の間は猛獸と闘つてゐる熱帯



の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、限なく世界を照らす月光の、人の胸懷に浸みわたることは、恰もその影の、千草の



(筆風草野長) 月 霽 秋 高

露の玉毎に宿るやうなものである。うちむかふ月は一つの影ながら、うかぶは千々の思なりけり。で

ある。

東西古今、悲喜哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、この光に向かつて訴へられた。これを嗟歎し、これを吟咏した詩歌の感吟

(一)賀茂真淵の門人荷田蒼生子の歌

嗟歎感吟

古往今來

は、世界各國の文學に充ち満ちてゐる。天文學者はいふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。この冷たい光が、古往今來どれほどの暖みを人間に與へたか、また現に與へつゝあるか。月は永久に人間の友である。

乾坤を一つにす (一)新編古今集、僧仙覺の歌

(二)唐の詩人白樂天の句

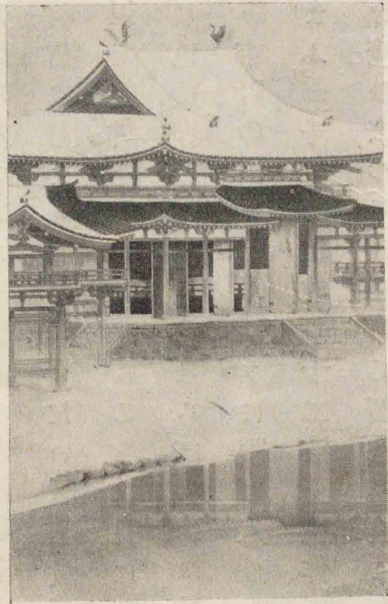
廣寒宮

瓊玉を敷く

雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔な色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓茅屋も皆同じ色に埋められる。花ならば咲かぬ梢もまじらまし、なべて雪降るみ吉野の山といふやうに、眼に入るもの、悉くその下に包まれてしまふ。三千世界銀成色、十二樓臺玉作層の美觀は、一切の人間の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちてくるこの純白な色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感じられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、たゞ一條の川水を殘して、山といはず、野といはず、瞬く中に瓊玉を敷く莊嚴な觀は、眞に



人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉いろいろな眺はもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新緑の色も、目の覺めるや



(筆天彩村田) 雪の閣樓

ある極樂淨土は、決して我等の世界ほど楽しいものではなからう。雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪はたゞ一色である。花のさ

對照の妙  
造化の巧

棺郭

(一) 年ふれば齡は老いぬし、か  
はあれど、花か  
をいれども、  
のおもひもな  
し。古全集  
藤原良房

まざま、どれを見てても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲亂れるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、香しい匂さへもつてゐる。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも、無限な詩趣を備へてゐる。富貴の庭園に培ふ花に價を生じたのは無理はないが、山の花、野の花、いづれも月雪と同じやうに、一文錢を要せぬのも嬉しい。人世に花なくんば、どれほど寂寞を感じるのであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を慎んだのである。棺郭を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。死んでも花を忘れぬのである。月雪の眺はその皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艶麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々し、華美、華麗、華奢等の語は、皆花に基づいたものである。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚かである。余はたゞ花をし見ればもの



(一)新古今集、康資王の母の歌。

(二)古今集、清原深養父の歌。

(三)謡曲「葛城」の句。

おもひもなし。といふ古歌を以てすべてを總括し得べしと信ずる。月雪花三つの眺には各その特長がある。いづれを前、いづれを後といふことは出来ぬ。

(一) やま櫻花の下風吹きにけり  
木のもとごとの雪のむらぎえ  
これは花を雪に譬へたのである。

(二) ふゆながら空より花の散りくるは  
雲のあなたは春にやあるらん  
これは雪を花に譬へたのである。

(三) 笠は重し吳山の雪。鞋はかんばし楚地の花。肩上の笠には無影の月を傾け、檐頭の柴には不香の花を手折る。  
これは雪を月と花とに譬へたのである。

花を賞して月を愛せぬ人はない。月花を愛して雪を賞でぬ人もない。

寸紅

(一)C. 不夜城の観

(二)伊藤仁齋の歌。

(三)唐の劉廷芝が「白頭を悲しむ翁に代りて」の詩句。

思へ、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に閉されてある極北の國では、氷は即ち人の家である。この地方の人に寸紅の目を樂しましめるものもない。またこれに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見たことがない。ガス、電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華なロンドンの住民も、秋冬の半年は、美しい月の光を見ることが出来ない。我等日本人の昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花の眺は古人の歴史が加はつて一層の感興が増す。世々を経てながめし人の數にまた、我をもゆるせ秋の夜の月。月は古來の歴史を照らす鏡である。年年歳歳花相似。歳歳年年人不同。人生の感は花を見て益繁く、雪を見て愈多。二千六百年來、月雪花三つの眺



を有し得た我等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に傳へたるよ。如何に多くの追慕を我等に催さしむるよ。

（以下は非常に淡く印刷された漢文の本文が続く）

改新帝國讀本 卷五終

浦野製

昭和四年九月二十三日發行  
昭和五年二月二十五日訂正再版發行  
昭和五年二月八日訂正再版發行

改新帝國讀本 奧附

定價		昭和五年臨時	
卷一、二 各金四拾五錢	卷三、四 各金四拾參錢	卷五、六 各金四拾壹錢	卷七、八 各金四拾壹錢
卷九 各金參拾五錢	卷十 各金參拾參錢	卷一、二 各金七拾參錢	卷三、四 各金七拾七錢
卷五、六 各金六拾七錢	卷七、八 各金六拾七錢	卷九 各金五拾七錢	卷十 各金五拾四錢

編者 芳賀矢一  
訂補者 上田萬年  
同 長谷川福平  
發行者 東京市神田區通神保町九番地 富山房  
代表者 坂本嘉治馬



發行所

東京市神田區通神保町九番地  
富山房  
會社資

電話九段一九三—一九三五番  
振替口座東京五〇一番

印刷所 富山房印刷部





登 林 領

會 豐

山 領

東京市練田湖區橋本町三丁目

東京市練田湖區橋本町三丁目

登 林 領  
會 豐  
山 領

登 林 領  
會 豐  
山 領

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

東京市練田湖區橋本町三丁目



三十三

遠山勝俊男